

## 関口存男における前置詞研究：意味形態

著者	佐藤 清昭
journal or publication title	浜松医科大学紀要. 一般教育
volume	21
page range	35-75
year	2007-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/29">http://hdl.handle.net/10271/29</a>

# 関口存男における前置詞研究 — 意味形態の普遍性 —

佐藤 清昭  
(日本語・日本事情)

Erforschung der Präpositionen bei Sekiguchi T.

SATÔ Kiyooki  
*Japanisch u. Japanische Angelegenheiten*

はじめに

1. 「ドイツ語前置詞の研究」のドイツ語訳とその書評
2. 書評に書かれていること
3. 本論文の目指すところ
4. 文化にかかわる学問の課題

本論

1. *am* Tage, しかし *in* der Nacht
2. 「およそ」の *an* die
3. 「展張」という考え方, そして普遍的な意味形態
4. 前置詞 *in* の研究
5. 関口の研究はどのようにして可能だったのか?

おわりに

## Zusammenfassung

Ein Werk des japanischen Philosophen und Sprachwissenschaftlers SEKIGUCHI Tsugio (1894-1958), „Imikeitai o chushin to suru doitsugo zenchishi no kenkyu“ (1943), ist ins Deutsche übersetzt worden: „Deutsche Präpositionen. Studien zu ihrer Bedeutungsform“ (Niemeyer 1994).

Es wurden zu dieser Übersetzung 6 Rezensionen geschrieben, in denen sich durchaus positive Bemerkungen und Anerkennung zu diesem Werk Sekiguchis und dessen originellem Forschungsverfahren feststellen lassen:

„Es liegt vor ein überaus interessantes, anregendes und gleichzeitig ungewöhnliches Buch.“ Es biete „Einblick in eine wissenschaftliche Denkart, die bislang (mir) fremd und verborgen war.“ (**Norbert Richard Wolf**)

Sekiguchi analysiere „haarscharf die Verwendung einer Präposition nach ihren Effekten, Kontrasten und Bedingungen“. „Sekiguchi war seiner Zeit unzweifelhaft weit voraus.“ (**O. Leys**)

Sekiguchi „geht ... auf so wohlbekanntes und vielleicht nicht in dem Maße durchschaute präpositionale Fügungen ein wie die folgenden: ...“ (**Karl Sornig**)

**Wolf** bemerkt ferner: „Wir können diesen schwer zu fassenden Begriff der ‚Bedeutungsform‘ als den Versuch verstehen, hinter allen ausdrucksseitigen Phänomenen eine inhaltsseitige Gesetzmäßigkeit zu entdecken, eine Gesetzmäßigkeit, die vor allem dem Japaner auffällt, der der deutschen Sprache naturgemäß sehr distanziert ... gegenübersteht. Das Ergebnis dieses Bemühens sind überaus einfühlsame und differenzierte Beschreibungen, die in zahlreichen Punkten überraschende und wertvolle Einblicke erlauben.“

Im vorliegenden Aufsatz wird versucht, an Hand der Beispiele von „*am Tag*, aber *in der Nacht*“, „*an die 60*“ und „*in*“ aufzuklären, wie und in welchen Punkten Sekiguchi sich im Bereich der Präpositionsforschung von anderen Forschern abhebt und woher dieser Unterschied kommt.

Wenn man zwischen Sekiguchi und anderen Forschern einen Unterschied feststellt, so ist dies auf folgende Gründe zurückzuführen:

- 1) Sekiguchi untersucht die Präposition nicht als solche, sondern im Zusammenhang mit dem Verb, von dem sie regiert wird,
- 2) Sekiguchi versteht die „Bedeutung“ in verschiedenen Schichten („sich rächen“ und „sich großzügig benehmen“ haben zwar zwei verschiedene „Bedeutungen“, beide gehören aber auf einer höheren Ebene des Inhaltes zur selben Typ „Behandlung“),
- 3) Sekiguchi war eigentlich ein Philosoph, d. h., seiner sprachwissenschaftlichen Leistung liegt solide und umfangreiche Kenntnisse über die europäische Philosophie zugrunde,
- 4) vor allem ist Sekiguchis Forschungsverfahren im Sinne von Georg von der Gabelentz „synthetisch“.

**key words:** SEKIGUCHI Tsugio, semantic form, preposition

キーワード: 関口存男, 意味形態, 前置詞

## はじめに

### 1. 「ドイツ語前置詞の研究」のドイツ語訳とその書評

1994年、関口存男(1894-1958)の小著「意味形態を中心とするドイツ語前置詞の研究」(1943)<sup>(1)</sup>がドイツ語に訳され、出版された。<sup>(2)</sup>「単行本」としては関口の著作の初訳である。<sup>(3)</sup>

このドイツ語訳について、書評が6編書かれた。次のものである。

**Winfred P. Lehmann** (1995), in: *General Linguistics* 34, S. 127-128. (アメリカ合衆国)

**O. Leys** (1995), in: *Leuvense Bijdragen* 84, S. 239-240. (ベルギー)

**Karl Sornig** (1995), in: *Grazer Linguistische Studien* 43, S. 139. (オーストリア)

**Edgar C. Polomé** (1996), in: *The Journal of Indo-European Studies* 24, Nr. 1/2, S. 134. (アメリカ合衆国)

**Norbert Richard Wolf** (1997), in: *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik* 64, S. 207. (ドイツ)

**Ludwig M. Eichinger** (1998), in: *Kratylos* 43, S. 211-214. (ドイツ)

これらの書評について、そしてドイツ語訳そのものについて、Wilfried Kürschnerはある時、次のように指摘した。<sup>(4)</sup>

- (1) ある個別テーマについての学問的書籍の場合、書評が6編も書かれるというのは注目に値する。
- (2) 書評は、ドイツだけでなく、ベルギー、オーストリア、そしてアメリカの名高い研究者によって書かれた。
- (3) インターネットを調べてみると、この翻訳が授業で使われていたり(ロマンス語圏も含む)、修士論文・博士論文でも引用されていることが分かる。
- (4) これらのことから、この翻訳が西欧においてある一定の効果を上げつつあると言うことができる。

### 2. 書評に書かれていること

2.1. 書評には、注目すべき点として以下のような記述が見られる。

**Winfred P. Lehmann** (1995)

「時として、普通一般に主張されているものとは異なる見解に基づく研究書に出会うことがある(関

---

(1) 関口存男: 意味形態を中心とするドイツ語前置詞の研究。初版1943, 東京: 三修社1984。本文107ページ, 練習問題7ページ, 序(1)(1943年)2ページ, 序(2)(1957年)2ページ。  
(2) Tsugio Sekiguchi: *Deutsche Präpositionen. Studien zu ihrer Bedeutungsform. Mit Beiträgen von Eugenio Coseriu und Kennosuke Ezawa.* Hrsg. von K. Ezawa, W. Kürschner u. I. Suwa. Tübingen: Niemeyer 1994.  
(3) これより先に訳された関口の著作として、「Dochとはなんぞや?」がある: Was heißt „doch“? Übersetzt von K. Ezawa. In: H. Weydt (Hrsg.): *Aspekte der Modalpartikeln.* Tübingen: Niemeyer 1977, S. 3-9.  
(4) Wilfried Kürschnerは、このドイツ語訳の編集者の一人である。本指摘は次の講演会でなされた: 姫路獨協大学特別公開講演会「姫路の生んだ世界的言語学者・関口存男」。2002年3月28日, イーグレ姫路にて。

口のこの本はそういうものの一つである。』(カッコ内補足佐藤)

「読者は関口の、一般的な観察と教育的な説明の混ざった(含蓄に富む)主張に接して大きな喜びを感じるだろう」

「コセリウは関口の仕事における不十分な点を指摘しているけれども、コンテキストにおける意味の(実に正確な)検証は、私たちの今までの言語記述が、(文法にせよ、辞書にせよ、文体にせよ)不完全なものであったことを明らかにしてしまう」

「言語学者たちはいずれ、生物学者がDNAや染色体といった研究対象を完全に記述しつくそうとするように、まずは言語を徹底的に記述することから始めることになるかもしれない。そしてその際の知見を、他のサイエンスの知見と関連づけて解明しようとするかもしれない。そうなれば関口の膨大な文例集はおそらく、ドイツ語についてのそういう企図のきっかけを提供することになるだろう。その時には現行の諸文法は、言語を説明する幼稚な試みに過ぎなかったと見なされよう。」

#### **O. Leys (1995)**

「前置詞の領域における、今まで知られておらず、また思いがけない関係を明らかにしている」

「それぞれの章の分かりやすい構成」

「前置詞の用法を、その効果と対比と条件にしたがって非常に鋭く分析」

「関口が時代に先んじていたことは疑いない」

「関口のほかの文法研究が翻訳され、国際的な研究に資することを願う」

#### **Karl Sornig (1995)**

「関口の『意味形態』とは、生成意味論がよりどころとするところのもの、つまり、多かれ少なかれ言語前的な(vorsprachlich)思考範疇(Denkkategorie)に相当するものであり、この思考範疇は個別言語的にはいろいろな形態となって表れるものである」

「関口は、数多くの例文を手がかりとして(そしてこの例文の多さは彼の教育的情熱を示すものだが)前置詞の本質的な意味機能をはっきり示そうと試みる」

「関口は、それがよく知られてはいるが、しかし多分これ程までに本質を見抜かれたことのない前置詞の用法を検討していく」

#### **Edgar C. Polomé (1996)**

「前置詞の一つひとつについて、関口はその意味上の中心を規定しようと試み、それにしたがってそれぞれの前置詞の機能を確定しようとする。本書は、関口の独創的な考え方が対象を深く洞察していることを決定的に証明するものである」

#### **Norbert Richard Wolf (1997)**

「非常に興味深く、刺激的で、同時に一風変わった本である。」

「本書は、今まで(少なくとも私には)馴染みのない、未知な学問的考え方をかいま見せてくれる」

「(後ろにのっている) 江沢の論文は関口の生涯を概説するというよりは、日本とヨーロッパの文化的相違を教えてくれる。関口の学問的な考え方も、この違いに基づいてはじめて理解することができる。」

「『意味形態』とは、すべての『表現』現象のうしろに『内容』的な規則性を発見しようとする試みである。この規則性は、特に(当然のことながらドイツ語から大きな距離を置いている)日本人の注意をひく。」

「この規則性を発見しようとする試みの結果は、とても感情のこもった、きめ細かな説明であり、その説明は数多くの点で驚くべき、そして価値ある洞察をもたらしてくれる。」

### Ludwig M. Eichinger (1998)

「関口は、ドイツ語の前置詞の使い方 (Gebrauchsweisen) を説明するが、それは、私たちドイツ人がそれぞれの前置詞の意味分析を行う時に、たぶん第一には思いつかないであろう使い方である。」

「関口は、意味的に接しあう領域を遍歴し、それぞれの前置詞の使い方を、ドイツ語の前置詞の錯綜した網目細工の中に位置づける。」

「前置詞の用法についての関口の観察が、ドイツ語の運用文法 (eine Grammatik des Gebrauchs des Deutschen) にどのように貢献できるか、知りたいと思う。」

2. 2. 以上一様に、関口のこの書と文例集を高く評価し、その独創性を指摘している。そしてその研究成果、および学問的な考え方が、今までの前置詞研究と「異なる」と述べる。Wolf はさらに、その違いのよってくるところを日本とヨーロッパの文化的相違に求めようとするのである。

### 3. 本論文の目指すところ

本論文では、関口の前置詞研究 (つまりは関口の意味形態文法) が、他の研究と「どこ」が「どのように」違い、それは「なぜ」なのか、考察してみたい。その際の拠り所とするのは、

- (1) 「*am Tage* であるが、*in der Nacht* という背景」の説明、
- (2) 「『およそ』の *an die*」についての説明、
- (3) 前置詞 *in* の意味用法記述

の3点である。(1) と (2) では個々の問題が中心に位置する一方、(3) では総体的な観点から一つの前置詞の意味記述全体に注目するのである。それぞれ、他の研究書と比較検討しながら「違い」を明らかにしていきたい。

#### 4. 文化にかかわる学問の課題

Eugenio Coseriu はある講義において、「文化にかかわる学問」、つまり「人間の学問」の課題を以下のように定義した。<sup>(5)</sup>

„Die Aufgabe einer Kulturwissenschaft, d. h. einer Wissenschaft des Menschen, ist, gerade das Intuitive zum Reflexiven zu machen, das schon *Bekannte* zum *Erkannten*.“

「文化科学、つまり人間に関する学問の課題は、まさに直観的なことを内省的なことに、『知られていること』を『認識されたこと』にすることにあり」。

本論文は、この「人間に関する学問の課題」を、関口の言語理論において果たそうとするものである。

### 本論

#### 1. *am Tage*, しかし *in der Nacht*

「昼間に」というのを *am Tage* と言うのに対し、「夜に」は *in der Nacht* と言う。ともに「時点」を表す意味ながら、「昼」と「夜」で異なった前置詞が用いられる背景は、どのように説明されるのであろうか。

1. 1. 関口が分類する *an* の用法の中に「当面過程の *an*」というものがある。「...に当面する」, 「...に臨む」, 「...の番になる」という内容である。<sup>(6)</sup>

- ・ Die Zahl ist *am Wachsen*.
- ・ Es war mir, als sei ich *am Sterben*.
- ・ Er war nahe *am Ertrinken*.
- ・ Die Preise sind nunmehr *am Steigen*.
- ・ Oft war sie dicht *am Erwachen*.
- ・ *am Tode* sein, liegen
- ・ Wir sind *am dritten Kinde*.
- ・ Ich bin *an der achten Zigarette*.

---

(5) Tübingen 大学の 1979 年の夏学期における一般言語学の講義 „Grammatik und Sprachwissenschaft. Über den Strukturalismus hinaus“ において (1979 年 5 月 29 日)。

(6) 「当面過程の *an*」について詳しくは以下を参照: 冠詞 I: S. 797, 866-870, 968-969; 文例集 69 (an): S. 134-139.

「当面過程の an」は不定形名詞とともに用いられるのが普通であるが、他の動作名詞や動作名詞以外の名詞とも結びつくこともある。そして関口は特に、それが時間関係の表現に用いられる場合を「独逸語独得である」として、in との違いに基づいて次のように説明する。(7)

だいいち、朝、昼、晩、夜を表わすのに、夜だけが *in der Nacht* で、他は全部 *am Morgen*, *am Tag*, *am Mittag*, *am Abend* であるのは何故か？それは、夜は、就寝時であり、いわば時が歩みをとどめて、いわばもはや生きた現実の「時」ではなく「いよいよ」という気持で「当面」して取っ組むべき「局面」ではないからである。朝や昼や晩には行動的に「臨んでいる」(an!) のであるが、夜はもはや局面としての緊張が止んでいるから、夜「の中」(in) に前際後際を断って沈住しているきりである。また「日」は *am 1. Mai* と表現するが、*Woche*, *Monat*, *Jahr*, *Zeitalter* は in を用いる。それは、来る日来る日は *Existenz* の生きた局面であるが、週や月や年になると、吾人の直接意識を以ては接触 (an!) し得ない遠い抽象界の概念的現象となってしまうからである。「生きている」を *am Leben sein* と云い、客観的に「一生涯の中に」という時には *im Leben* というのも同じわけである。——ドイツ語に近い英語ですら、その on にはもはや本当に生きた「当面過程」と「臨局」の意味形態は見受けられない。眼ざめた意識を以て時々刻々に当面し対処する主観の表現たる「当面の an」はドイツ語語彙中の至宝の一つである。……………独の「当面過程」の an には、はっきりと、「局面に臨む」意味があり、時々刻々吾人の意識がぶつかって行く、未来一辺倒の、非可逆的、非空間的、発展的、過程的（即ち Bergson, Heidegger の考えたような）時間を想わせる特色がある。

非常に興味深い説明であると思う。関口は、前置詞 an の「本質」を次のように説明するが、(8) この「本質」から「当面過程の an」という意味形態が生まれ、それが時間関係の表現に用いられる過程、そしてそれに基づいた「an と in との違い」は、説得力がある。

an の本質

in の反対。in が内部を指すに対して、an は外部を指す。ただし「外部」といっても、*außer* や *außerhalb* とはちがって、そのものを遠く離れた外部を指すのではなく、すぐそのものの一部をなしている「外面」、またはすぐそのものに接触する「域」を指す。

「外面」: *An einem Körper bemerken wir zwei Eigenschaften: seine Gestalt und seine Farbe.*

「域」: *Der Wagen hielt am Bürgersteig.*

1. 2. さてこれに対して、ほかの文法書や研究書は「*am Tag*, しかし *in der Nacht*」の背景をどのように説明しているだろうか。次の書を調べた。

(7) 冠詞 I, S. 869f.

(8) 参照: ドイツ語前置詞の研究, S. 94; ドイツ語学講話, S. 379f.; 冠詞 I, S. 253.



代表的な文法書・研究書

**DUDEN:** Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. 6., neu bearbeitete Aufl. 1998.

**Johannes Eben:** Deutsche Grammatik. Ein Abriß. München: Max Hueber 1972.

**Hennig Brinkmann:** Die Deutsche Sprache. Gestalt und Leistung. Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann 1962. 2., neubearbeitete und erweiterte Auf. 1971.

外国人に対する授業のための文法書

**Gerhard Helbig/Joachim Buscha:** Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie 1972. Neubearbeitung 1984.

**Heinz Griesbach:** Neue deutsche Grammatik. Berlin u. München: Langenscheidt 1986.

テキスト文法の立場から

**Harald Weinrich:** Textgrammatik der deutschen Sprache. Hildesheim u. a.: Georg Olms Verlag 1993. Dritte revidierte Aufl. 2005.

英語で書かれたドイツ語文法

**George O. Curme:** A Grammar of the German Language. New York: Frederick Ungar Publishing 1904, Second Revised Edition 1922.

前置詞の研究書

**Werner Schmitz:** Der Gebrauch der deutschen Präpositionen. München: Max Hueber 1964 (87 ページ).

**Eike Forstreuter/Kurt Egerer-Möslein:** Die Präpositionen. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie 1978 (Linguistischer Teil: 56 ページ, Übungsteil: 41 ページ).

**Jochen Schröder:** Lexikon deutscher Präpositionen. Leipzig: Verlag Enzyklopädie 1985 (268 ページ).

以上の書は、「*am Tag*, しかし *in der Nacht*」に関して大きく4つのグループに分かれる。

- a) 対応について言及のないもの (**Duden; Erben; Griesbach**)
- b) 対応をあげるだけで、説明はないもの (**Schmitz; Forstreuter/Egerer-Möslein; Schröder**)
- c) 対応をあげ、違いを「文法的に」説明するもの (**Helbig/Buscha**)
- d) 対応をあげ、違いの背景を説明するもの (**Brinkmann; Weinrich; Curme**)

- b) グループに属するものは次のような記述を行う。

**Schmitz** (S. 55)

*am Morgen, Vormittag, Mittag, Nachmittag, Abend* aber: *in der Frühe, Dämmerung, Nacht: um Mitternacht*

**Forstreuter/Egerer-Möslein** (S. 97)

am Morgen, am Mittag, am Abend, am Tage (aber: in der Nacht)

**Schröder** (S. 55f.)

**An** ist dabei eine obligatorische Variante von **in** (vgl. **in 2.1.**) bei *Tag*, Komposita mit *-tag*, allen Tageszeitbezeichnungen außer *in der Nacht*, *in der Frühe* und *zu Mittag*.

● **c)** の **Helbig/Buscha** は、「女性名詞の Zeitangabe (時の状況語) の前では **an** ではなく、**in**」と説明する。(S. 416f.)

Vor den Substantiven *Tag*, *Abend*, *Anfang*, *Ende* u. ä.

Am Abend gab es ein schweres Gewitter.

Am nächsten Sonntag will ich mit meinen Freunden einen Ausflug unternehmen.

Anmerkung:

Vor fem. Zeitangaben steht nicht *an*, sondern *in*:

In der Nacht hat es geregnet.

「逆は真ではない」(つまり **in** は女性名詞とだけ用いられるわけではない) つもりであろうし、この記述に続く vor Datumsangaben の項では *im Dezember 1970* という例をあげているけれども、(*im Frühling*, *im Jahre 2006* 等の例をあげるまでもなく) ずさんな説明であると思う。

● **d)** に属するものの「背景説明」は次のとおりである。

**Brinkmann** (S. 152, 153)

**an** は「接触」(**Kontakt**) の関係を表現する。

*am Tage* / *in der Nacht* の違いは、本質的には見方 (**Sehweise**) の違いによる。つまり *in der Nacht* が人間が夜に取り巻かれていることを意味するのに対し、*am Tage* は単に部分的な関係のみ存在することが表現される (*am Anfang*, *am Ende*, *am Morgen* を参照)

**Curme** の説明 (S. 379) も **Brinkmann** に近い。

*am Tage* だが、*in der Nacht* である。それは、**an** は表面、つまり目に見えるものを示すのに対して **in** はこの場合、暗やみが包み込むという考え方だからである。それゆえ、*Es liegt am Tage*. と言うのに対し、*Es ist in Dunkel gehüllt*. とも言うのである。同じ理由から、自分自身を一定期間の「内部」に見るという意味で *im Sommer*, *im Winter* と言う。

**Weinrich** では an と in との対比はなされていないが、an の説明が参考になる。(S. 621, S. 623f.)

an の意味は KONTAKT 「接触」という意味指標 (das semantische Merkmal) で表すことができる。

an の用法にとって、コンテキストが空間的か、時間的かということは、基本的には重要ではない。空間的であれ、時間的であれ、ともに「接触」を意味する。時間的であれば次のような表現である: /ein Besuch am Sonntag, ein Ausflug am 1. Mai/, /Ankunft am Morgen, Abfahrt am Abend/  
an によって、比較的長期の時間というより、行動するに重要な、何かが起きる時間 (eine handlungsrelevante Ereigniszeit) が表現される。

1. 3. an についての **Brinkmann** の「接触」、**Curme** の「表面」という考え方、それに対して in は「取り巻く」、あるいは「包み込む」という説明は興味深い。また **Weinrich** の「eine handlungsrelevante Ereigniszeit の表現」というのは、関口の説明に通じるものがあるだろう。

しかし関口の説明の要点は、次のようであった。

am Morgen, am Tag, am Mittag, am Abend などは、

- 生きた現実の「時」に「いよいよ」という気持で「当面」して取っ組んでいる
- 行動的に「臨んでいる」
- 局面としての緊張が存在
- 来る日来る日は Existenz の生きた局面であり、吾人の直接意識を以て接触 (an!) することができる (週や月や年になると、直接意識を以ては接触し得ない遠い抽象界の概念的現象となってしまう)
- 本当に生きた「当面過程」と「臨局」の意味形態
- 眼ざめた意識を以て時々刻々に当面し対処する主観の表現
- はっきりと、「局面に臨む」意味
- 時々刻々吾人の意識がぶつかって行く、未来一辺倒の、非可逆的、非空間的、発展的、過程的 (即ち Bergson, Heidegger の考えたような) 時間を想わせる

つまり関口の言う「当面過程」という意味形態は、**Brinkmann**, **Curme** の「接触」、あるいは「表面」というような静的で生やさしい意味関係ではなく、非常に緊張感のある、せっぱつまった、ダイナミックな、「未来」という方向性をはっきりと示す考え方であることが分かる。この説明は、「人間」というものに対する「哲学的な解釈」に基づくものであり、ここには **Brinkmann**, **Curme**, **Weinrich** に比べて数段深い洞察が存在する。

## 2. 「およそ」の an die

『「およそ」の an die』とは、たとえば Er ist *an die* 60. 「彼はおおよそ 60 歳だ」という時の an die である。

2. 1. an die に関して、本論 1. 2. にあげた文法書・研究書は次のようにグループ分けされる。

- a) 言及のないもの (Duden; Brinkmann; Helbig/Buscha)
  - b) 例だけをあげるか、「an die は数字の前に孤立して位置する」というような形態上の説明にとどまるもの (Griesbach; Curme; Schmitz; Forstreuter/Egerer-Möslein; Schröder)<sup>(9)</sup>
  - c) an の意味から説明するもの (Erben; Weinrich)
- c) に属する Erben と Weinrich も、その説明はそれぞれほんの数行にとどまる。

Erben (S. 183)

*Es waren gegen 100 Besucher anwesend.* 「達する、及ぶ」(ein Heranreichen) が表現される *an die* も同じようである。

Weinrich (S. 624)

ある時点に達するのではなく、近づくだけという場合も (einem bestimmten Zeitpunkt nur nahekommen), この「近づき (Beinahe)」は同じく an で表現することができる。  
/wie alt mag er wohl sein? ÷ ich glaube, er ist (so) an die fünfzig (Jahre alt)/

2. 2. 関口はこれに対して、an die の背景に「展張限度」という「人間の考え方」(意味形態) を認める。

此の場合の an は展張限度の an である: an と四格の die を用いるのは、明らかに bis an die ~ ,..... 云々にも達する“の意から来たものに相違ない。現に、年齢が „六十歳にも達する“は an die Sechzig reichen というから。<sup>(10)</sup>

「展張限度」とは、聞き慣れない言葉である。関口は「展張」に対応するドイツ語として、sich erstrecken, sich ausdehnen をあてている。<sup>(11)</sup>つまり、運動、成長、拡大、傾向などの動作が「広がり、伸びていく」という意味での「展張」であり、そこにさらに bis (「そこまで」という考え方)が入って「展張限度」となる。<sup>(12)</sup>

(9) Griesbach, S. 200; Curme, S. 380; Schmitz, S. 55; Forstreuter/Egerer-Möslein, S. 97; Schröder, S. 59.

(10) 冠詞 I, S. 1052.

(11) 参照: 冠詞 I, S. 1007.

(12) 参照: 冠詞 I, S. 1014.

「展張」には「勢い」があること、そしてそれが単にこの場合に限らない、「文法全般にわたる広汎な整理見地 (Ordnungsprinzip) の一つである」<sup>(13)</sup> ことについては本論文の第 2 章で詳しく述べる。

関口は、an die の例として「定冠詞を用いた場合」を 8 例、「定冠詞を用いない場合」を 8 例あげる。<sup>(14)</sup> ここにはそれぞれ 4 例ずつあげるが、それらを見ても分かるとおおり、例文は多種多様なところから取られており、他の文法書、研究書が、an のこの用法を「ほんのついでに」取り上げている中、関口は例文の多さでも群を抜いている。<sup>(15)</sup>

Heiße Magister, heiße Doktor gar, / Und ziehe schon an die zehen Jahr / Herauf, herab und quer und krumm / Meine Schüler an der Nase herum. (*Goethe: Faust I*)

学士・博士の名を名乗り、教鞭取って十年、蜘蛛手かくなわ十字、引きずり廻した弟子門弟。

Herr, als noch bei Marchegg der Kaiser stand, / Da zählt' er tausend Streiter, und nicht mehr; / Jetzt ist er an die dreißigtausend stark. (*Grillparzer: König Ottokars Glück und Ende*)

Marchegg 附近にある頃は、軍勢わずか一千騎、今はその数三万に、なんなんとする皇帝軍。

In der Bücherei unsers Domsitzes zu Konstanz gibts ein Buch, worin an die fünfundzwanzig Singer beieinander stehen. (*Keller: Hadlaub*)

Konstanz の本山の書庫には、凡そ二十五人の歌人を並べた書物がある。

Und es gehörten wohl an die dreißig Dörfer dazu. (*Th. Fontane: Irrungen Wirrungen*)

そして、凡そ 30 に近い部落がその管下にあった。

In Steier mindestens, in Krain und Kärnten / Ist ausgetilgt der Keim der Ketzerei. / An einem Tag auf fürstlichen Befehl / Bekehrten sich an sechzigtausend Seelen, / Und zwanzigtausend wandern flüchtig aus. (*Grillparzer: Ein Bruderzwist in Habsburg*)

少くとも Steier, Krain, Kärnten の各州では、邪宗門は一掃されている。公の達示によって一日に凡そ六万の衆生が改宗し、二万の民が国外に逃亡した。

HOFER : Wie weit sind sie? — DIE TYROLER: An tausend Schritt vom Berg. (*Immermann: Andreas Hofer*)

HOFER: どの辺まで来ている。 — DIE TYROLER: 山から千歩ほどのところに近づきました。

Allein wie schaute er hoch auf, da alle Leute dort die Köpfe nach ihm aus den Fenstern streckten und ihm die Kinder auf der Gasse, an zwanzig, mit Geschrei nachsprangen und sangen. (*Mörike: Das Stuttgarter*

---

(13) 冠詞 I, S. 1010.

(14) 参照: 冠詞 I, S. 1050-1052.

(15) 「およそ」の意味の an の例文は、文例集 69 (an), S. 7-10 にも見られる。

*Hutzelmännlein*)

ところが、かれが来るのを見ると、其の辺の人達がみんな窓から顔を出して眺め、街にいた子供達が、凡そ二十人近くも、わいわい云って後を追い、歌を歌ったので、かれは意気軒昂たるものがあつた。

Ihr Mann hätte das physisch nie ertragen, wenn er nicht außerhalb der Mahlzeiten große Mengen von Schokolade verzehrt und an sechzig bis hundert Zigaretten täglich geraucht hätte. (*Zeitung*)

彼女の良人も、それではとても身体がつづかなかつたかも知れないが、食事以外にうんとチョコレートを食べたり、一日に60本から百本もタバコを吸ったりして、どうやらやってきたのだ。

2. 3. **Erben** の「Heranreichen」、そして **Weinrich** の「*einem bestimmten Zeitpunkt nahekommen*」という説明は、「展張限度」の考え方（「.....にも達する」）に通じるだろう。しかし関口とこの二人との決定的な差は、(次章で見るように)その文法観の違い（形態 *Form* から内容 *Inhalt* へ至るか、内容から形態へ至るかという「文法の方向」の違い）である。つまり関口の場合、

- (1)「展張限度」とは、「展張方向」・「展張範囲」とともに、「展張」という「より広範囲な考え方」の下位区分であり、
- (2)「展張限度」は、この場合にとどまらない、「人間の普遍的な考え方」であつて、これが表現される「形態」(*Form*)は *an die* に限らないのである。<sup>(16)</sup>

### 3. 「展張」という考え方、そして普遍的な意味形態

関口存男の言語理論を考察する時、「意味形態」という概念を避けて通ることはできない。関口はその著作の中で「意味形態」という用語をいくつか異なった意味で用いているが、<sup>(17)</sup>ここではそのうちの代表的なもの、つまり関口自らが「最も普通に用いる」と言う<sup>(18)</sup>「第二意味形態」について、「展張」を例として論じてみたい。<sup>(19)</sup>

(16) 関口はこの *an die* の説明を、「冠詞」第一巻「定冠詞篇」の第三篇「形式的定冠詞」の第八章「指向性前置詞と温存定冠詞」の中の「展張限度の *an*」の項で行う。「およその *an die*」が、「冠詞」の「形式的定冠詞」篇の「温存定冠詞」の部で取り扱われているという事情は、*an die* の問題がここでは定冠詞 *die* (複数4格)の観点から説明されていることによる。——展張方向、展張限度という意味形態が、とかく定冠詞を要求することについては以下を参照：冠詞 I, S. 1055f.

(17) 関口が「意味形態」という用語を異なった意味で用いていることについては、以下を参照：Satô (1981); 有田 (1985); — (1987).

(18) 参照：冠詞 I, S. 28, 313.

(19) 関口は「冠詞」第1巻において「突然」、意味形態を「第一、第二、第三」と区別する：第一意味形態「機構範疇」、第二意味形態「思想形態」、第三意味形態「構造」。参照：冠詞 I, S. 28. ただし、この「区別」の「兆候」はすでに1943年の「あぢきなや...とて [daß] なげきしか」に見られる：「もつとも意味形態という述語には三種の意味があるのですが.....」。関口 (1943 b), S. 35, 再録版 S. 223. ——「第一、第二、第三意味形態」の区別については、以下も参照：Satô (1981); 有田 (1985); — (1987).

### 3. 1. 意味形態文法は統合文法

3. 1. 1. 関口存男の意味形態文法は、Georg von der Gabelentz (1840-1893) が言うところの「統合文法システム」(das synthetische grammatische System) に相当する。つまり、そこに「与えられているのは思考内容であり、求められるのは形態 (Form)、表現 (Ausdruck) である」<sup>(20)</sup>。Gabelentz がこのシステムを「統合」(synthetisch) と呼ぶのは、それが文法的手段をいかに「統合」し、利用するかという観点に立つからである。<sup>(21)</sup>

意味形態文法が「統合文法」であることは、例えば関口の次の言葉が証している。

讀むための文法などというものは大したものには要らない、形容詞の變化ぐらいしっていればあとは辞書と常識とで間に合います。文を作るための文法にして初めて眞の文法であり、そのためには従来の文法を逆立ちさせて、まず意味の筋道の方を確立し、然る後その表現法を探求するというメトードに據るの外はありません。<sup>(22)</sup>

ドイツ人が既に拵へたものや、元つから在るものを教へるのが辞書で、ドイツ人が拵へるのと同じ筋路を以て別に拵へることを教へるのが文法であるとすれば、**意味形態の研究**こそは、これが本當の文法ではないでせうか。<sup>(23)</sup>

3. 1. 2. 「統合文法」とは、「話し手/書き手」の立場に立つものであり、出発点は「普遍的」universell な「意味内容」である。関口は、そういう普遍的な「人間の考え方」を「意味形態」と名づけた。たとえば関口は次のように述べる。

人類共通の『意味形態』なるものは、必ずしも吾人が特に興味を有する一具體的文法形式だけを尊重しては呉れない。こいつの立場からは接續法も助動詞も熟語も單語も一視同仁でなければなりません。<sup>(24)</sup>

(20) Gabelentz (1891), S. 86; 改訂第2版リプリント, S. 84.

(21) 参照: Gabelentz (1891), S. 87; 改訂第2版リプリント版 S. 85. — Gabelentz は、「必然的に補い合うことになる二つの文法システム」として、「分析システム」(das analytische System) と「統合システム」を区別する。「分析システム」においては「形態が与えられており、その思考内容が求められる」のであり、それが言語現象をバラバラに分解して説明しようとするから「分析的」と呼ばれる。Gabelentz の二つの文法システムの区別については以下を参照: Gabelentz (1881; 1960), S. 121, 353f.; Gabelentz (1891), S. 86ff., 96; 改訂第2版リプリント版 S. 84ff., 93; 佐藤 (1996), S. 100f.; — (1998), S. 61f.

(22) 接續法の詳細, S. 87. 下線佐藤。

(23) 搬動詞, S. 48. 太字関口, 下線佐藤。— このほか、意味形態文法が「統合的」であることについては例えば以下を参照: 独作文教程, S. 423; 接續法の詳細, 59, 130; 有田 (1980), S. 43; 牧野 (1976), S. 44; 国松 (1959; 1975), S. 515ff.

(24) 接續法の詳細, S. 59. 下線佐藤。



「意味形態」は、ドイツ語をも日本語をも離れた第三の存在なのです。(25)

3. 1. 3. したがって、上記の「展張限度」という意味形態も、同じく「普遍的」に理解されなければならない。つまり、この意味形態を表現する言語形態は、次に見るように *an die* に限らないし、また関口はその表現をドイツ語にとどまらずに、英、仏、羅、希という他の個別言語にも求めるのである。(26)

### 3. 2. 展張

「展張」*sich erstrecken, sich ausdehnen* とは、運動・成長・拡大・傾向などの動作が「どこまでも広がり、伸びていく」という考え方である。関口は、この(空間的、時間的、抽象的)意味形態を「文法全般にわたる広汎な整理見地 (*Ordnungsprinzip*) のひとつ」とする。(27)

*an die* の基礎にある「展張限度」は、「展張」という意味形態の下位区分である。「展張」という考え方はつまり、「展張範囲」、「展張方向」、「展張限度」として説明される。

「展張」という意味形態が「前置詞」を使って表現されるのは、主として *in, an, auf* の3つが4格を伴う場合であり、それぞれの意味形態は「展張方向の *in*」、「展張限度の [*bis*] *auf*」などのように、前置詞という言語形態と結びついた形で説明される。以下では、「展張方向の *in*」とその亜種、「展張限度の *auf*」、そして「展張範囲の *für* ほか」と「展張範囲の4格」の説明を取りあげる。(28)

#### 3. 2. 1. 展張方向

##### 展張方向の *in*

*Die Zeit erstreckt sich sowohl in die Vergangenheit als auch in die Zukunft.* 「時間は過去の方に向かって延びていると同時にまた未来の方にもむかっても無限である。」

運動、成長、拡大、傾向などの動作の展張していく方向を示しつつ、しかもその「底止」する点を明らかに示さない考え方。(29)

*das Blut ins Wallen bringen* 「血をわかす」 / *ins Stottern geraten* 「途中でどもりだす」 / *ins Schleudern geraten* / *ins Trudeln geraten (kommen)* / *ins Rollen kommen, geraten* / *ins Erzählen geraten*

「*in* (と四格) は、その状態に達した後といえどもまだしばらく動作が継続され、そこにまだ程度や

(25) 前置詞の研究, S. 70. 下線佐藤。意味形態の普遍的性格についてはこのほか以下を参照: 接続法の詳細, S. 60, 81; 冠詞 II, S. 107; 冠詞 III, S. 245f., 257.

(26) 「統合文法」のあり方, その言語学における意義については, 佐藤(1996)を参照。

(27) 参照: 冠詞 I, S. 1010.

(28) 「展張」についての詳しい説明, 豊富な例文は以下を参照: 冠詞 I, 第三篇「形式的定冠詞」, 第八章「指向性前置詞と温存定冠詞」。

(29) 参照: 冠詞 I, S. 1007.



激しさや方向や、その他色々な複雑な Faktoren が残ること、いわば方向としては無限につづくことを考える。つまりそれから先が問題だ、ということの意味するのである。」<sup>(30)</sup>

上記の例が「すべて zu ではなくて in でなければいけないというわけは、一たん其の状態に陥ったが最後、もはやブレーキが利かない、もはやとめるすべがない、という無限一方向運動を想わせんが為めである。」<sup>(31)</sup>

#### 激突急停止の in (「展張方向の in」の一亜種)

sich *ins* Schwert stürzen, sich *in sein* Schwert werfen 「自刃する」

*in eine Sense* fallen 「倒れて鎌が足にささる」

Dieser (der Offizier) hatte schon den einen Fuß ausgestreckt, um *in die Kurbel* zu stoßen, die den Zeichner *in* Gang bringen sollte; (*Franz Kafka: In der Strafkolonie*) 「当人の方は、すでに一方の足をぐいとさしのべて、印字機を運転させるためのハンドルを一突き突こうとしているところだった」

ここには、「大きな物が小さな細いものの中へ入り込むと云う、in の概念から見て甚だ辻褄の合わない空間関係思惟が要求されて」<sup>(32)</sup> いる。「けれども、此の『.....の中へ突入する』という考え方は、この場合には適しない。『突入』の『入』を捨てて『突』を採った考え方が即ち展張方向の in である」。<sup>(33)</sup> 「外部とか内部とか」いう考え方を離れた、ただ単に「方向」だけを念頭において、同時に何らかの「勢い」を表現しようとする意図。<sup>(34)</sup>

#### 趨向の in, 傾向の in (「展張方向の in」の一亜種)

「展張方向の in の本質は、其の指向性と『勢』とではあるが、その『勢』なるものは.....必ずしも『激しい勢』ではなく、時とすると『趨向』あるいは時として微妙な『傾向』である。」<sup>(35)</sup>

「趨向、傾向、発展、発育、進展その他一切の動作の漠然たる展張方向」<sup>(36)</sup>

Wir sehen heute nichts, das größer werden will, wir ahnen, daß es immer noch abwärts, abwärts geht, *ins Dürre, Gutmütigere, Klügere, Behaglichere, Mittelmäßigere, Gleichgültigere, Chinesischere, Christlichere* — (*Nietzsche: Genealogie der Moral*) 「現今ではもはや偉大になりそうなものと云っては何一つ目に触れて来ない。凡てがまだ相も変わらず低落転落の一路を辿りつつあることを感ずる。乾燥無味と、お人好しさと、小ざかしさと、イージーゴーイングと、凡庸と、ナンセンスと、中国式と、クリスチャン式に向かって底止するところを知らず転落してゆくことを。」

#### 経過遷延の in (「展張方向の in」の一亜種)

「時間の経過というものは、およそ無目標な指向性の典型的な場合と云うべきものであるから、終始

(30) 冠詞 I, S. 801.

(31) *ibidem.* そのほか「展張方向の in」については以下を参照: 冠詞 I, S. 1001-1020.

(32) 冠詞 I, S. 1002.

(33) 冠詞 I, S. 1003.

(34) 参照: 冠詞 I, S. 1004. そのほか「激突急停止の in」については以下を参照: 冠詞 I, S. 1002-1006.

(35) 冠詞 I, S. 1013.

(36) 冠詞 I, S. 1011. そのほか「趨向の in, 傾向の in」については以下を参照: 冠詞 I, S. 1011-1013.

点を考えない展張方向の *in* を以て表現するには最も適している。」<sup>(37)</sup>

Schon *in den sechsten Mond* liegt er im Turm / Und harrte auf den Richterspruch vergebens. (Schiller: Wilhelm Tell) 「牢に投ぜられてからもはや六箇月にもなり，なおいまだに判決の沙汰もございません。」

### 3. 2. 2. 展張限度

#### 展張限度の [bis] auf

「展張限度」は *auf* の場合，「詳しさ」の程度，「極端さ」の誇張，「除外」，「最高限度の副詞」として表れる。

*auf die Minute genau* 「分秒違えず」，*aufs Haar (auf ein Haar)*，*aufs Wort*，*auf den Tag* など「詳しさ」の程度を展張限度の [bis] *auf* で誇示する。<sup>(38)</sup>

*Krieg aufs Messer*，*aufs Blut*；*auf den Tod krank*，*verwundet*，*erschrocken*，*hassen*，*usw.* のように，「極端さ」の誇張的規定として慣用句を作ることはすこぶる自然。<sup>(39)</sup>

Das Gastzimmer war leer *bis auf einen Herrn*，*der anscheinend eingeschlafen war.*

「展張に展張して遂に最後の終止点に至るということは，その終止点にまでも及ぶのか，その終止点の一步手前で停止するのか，即ちその終止点を含むか含まないか，という点で両意を生ずる可能性」がある。はたして *bis auf* にはその両方の場合があるが，実際としては誤解の生まれる余地はない。<sup>(40)</sup>

*aufs beste (auf das beste)*，*aufs tiefste*，*aufs schnellste*

これら「最高限度の副詞」に表れる *auf* は，実は *bis auf*，つまり「良い状態」に限りなく近づきそこで停止するから「非常に良く」であり，展張限度の *auf* ということになる。<sup>(41)</sup>

### 3. 2. 3. 展張範囲 (Erstreckungsweite)

#### 展張範囲の für ほか

「予想期間」(「今後...にわたって」)の表現は，「展張する範囲」と考えられて，*auf*，*für*，*in* あるいは4格で表現される。<sup>(42)</sup>

*Auf wie lange darf ich's behalten?* / *Für wie lange darf ich's behalten?* / *Wie lange darf ich's behalten?*

*lange* は副詞でもあり，*lange Zeit* の省略と考えれば展張範囲の4格ということになる。

(37) 冠詞 I, S. 1017. そのほか「経過遷延の *in*」については以下を参照: 冠詞 I, S. 1017-1020.

(38) 参照: 冠詞 I, S. 1042.

(39) 参照: 冠詞 I, S. 1045.

(40) 参照: 冠詞 I, S. 1047.

(41) 参照: 冠詞 I, S. 1049; ドイツ語大講座 (6 巻本), 第3巻, S. 251. そのほか「展張限度の [bis] *auf* については以下を参照: 冠詞 I, S. 1042-1049. — 「展張限度の [bis] *in*」については以下に記述がある: 冠詞 I, S. 1014, 1035-1042.

(42) 参照: 冠詞 I, S. 1022f. なおこの場合の *auf* は「展張方向」とも考えられる。参照 *ibidem*.

#### 展張範囲の 4 格

そもそも 4 格というものは、時間の長さ、空間の長さ、量の程度、そのほかとにかく、時間をも空間をも物量をも強弱をも数をも程度をも、すべてを「展張範囲」と見て、画一的に「を」という考え方で表現する。それは英、仏、羅、希も同じである。(43)「展張という範疇を用いずしては『4 格』という現象の合理的な整理は不可能である。」(44)

hinauf, herab, her などと使われる 4 格

Er trug den schweren Koffer *die lange Treppe* hinauf; Wer kommt dort *die StaräÙe* her?; Er spazierte *den Bahnsteig* auf und ab.

ab- と関係する空間・時間の展張範囲表現の 4 格

*das Revier* abpatrouillieren「担当区域を巡邏する」; jemandem *den Körper* abtasten「ある人の身体を隅から隅まで触ってみる」; *seine Militärzeit* abdienen「徴兵期間をつとめ終える」

形容詞の量規定の 4 格

*einen Monat* lang; *drei Jahre* alt; *100 Meter* hoch; *drei Jahre* älter als ....

#### 4. 前置詞 in の研究

「*am Tage* と *in der Nacht*」, そして「『およそ』の *an die*」では、個別の問題点に立脚して関口と他の研究者との違いに注目した。本章では、ひとつの前置詞の意味記述全体から、その違いを追ってみる。前置詞 *in* を例として、それぞれの研究者がどのように意味記述をするか、比較するのである。(45)

4. 1. 取り上げる研究書は **Schmitz**, **Forstreuter/Egerer-Möslein**, **Schröder**, そして **Weinrich** である。これらを取り上げた理由は、前 3 書が総合的に前置詞を取り扱う「前置詞辞典」の性格を有すること、そして **Weinrich** は「テキスト文法」(Textgrammatik) の立場に立つものとして特に注目に値するからである。

##### ● Werner Schmitz:

Der Gebrauch der deutschen Präpositionen (München: Max Hueber 1964, 全 87 ページ)

(43) 参照: 冠詞 I, S. 637f.

(44) 冠詞 I, S. 1010. そのほか「展張範囲の 4 格」については以下を参照: 冠詞 II, S. 136; III, S. 219.

(45) 関口は前置詞 *an* に特別な思いがあったように思える。それは、「ドイツ語前置詞の研究」の全 11 章のうち、*an* について一番多くの章を割いていることから証されるし (*an* には 4 章が、他は *von* に 3 章、*mit* に 2 章、そして *um*, *in*, *zu*, *auf*, *bei* にそれぞれ 1 章が与えられている)、また次の関口の言葉が注目に値する:「*an* は『何々に即して、接して、の表面に』という意味で、英語にはびったりあてはまる前置詞がありません。*an* の色んな用法がわかり出せばドイツ語は卒業です」(ドイツ語大講座、第 3 巻, S. 263)。したがって、ここでは *an* を取り上げる方が適切だったかもしれないが、*in* は「ドイツ語前置詞の研究」の中で「付帯描写の *in*」しか取り上げられていないので、紹介の意味で *in* とした。

本書では、前置詞が4格支配, 3格支配, 3・4格支配, 2格支配の順番で並べられる。グループ中の前置詞の順序は(2格支配をのぞいて)アルファベット順である。

『『ドイツ語前置詞の用法』という題名が示す通り、本書は実用的な目的だけを追求したものであり、歴史的、および語源的観点は度外視してある』。(46) また前置詞のアルファベット順の並べ方について、Schmitz は次のように述べる: 「読者が全体像をつかみやすいように、そうしたのであり、『内容』にしたがった配列にしなかったが、個々の前置詞の意味に留まるだけでなく、『空間』、『時間』、『因果』、『様態』という内容をすべての前置詞に関して追っていくならば、前置詞間の微妙な違いが明らかとなるであろう」。(47)

in の記述には5ページが費やされ、次の4つのカテゴリーに分けて例が挙げられる。(48)

1. 空間的 (lokal)

転用と慣用用法 (übertragener und idiomatischer Gebrauch)

2. 時間的 (temporal) :

期間 (Zeitraum) と時点 (Zeitpunkt)

3. 様態 (modal)

4. in を要求する動詞 (たとえば einsteigen, eintreten in; sich vertiefen in; übersetzen ins Deutsche; sich irren in der Straße など)

in の項では、用法についての説明はない。例文、例句を羅列するだけである(他の前置詞では説明がある場合もある)。わずかに「aber:」による注意の喚起、あるいは「vgl.」の指示がある。たとえば:

*sie waren in den Ferien in Berlin, in Deutschland, in der Schweiz*

aber: fahren *nach* Berlin, *nach* Deutschland, *in* die Schweiz;

vgl. NACH lokal S. 36

*in der Frühe, der Dämmerung, der Nacht*

aber: *am* Tage, *am* Morgen usw.

全体を通して、例の羅列とその「辞書的な説明」によって、用法の説明に代える観がある。たとえば:

temporal (Zeitraum)

*Im Leben nicht!* = nie! als Ausdruck emphatischer Verneinung

(46) Vorbemerkung.

(47) Ibidem.

(48) 参照: S. 63 – 68.

modal

*in hohen Tönen reden* = hochtrabend, aufgeblasen (Art und Weise)

*in der Tat* = tatsächlich

● **Eike Forstreuter/Kurt Egerer-Möslein:**

Die Präpositionen (Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie 1978, Linguistischer Teil: 56 ページ, Übungsteil: 41 ページ)

旧東ドイツの Karl-Marx-Universität (Leipzig) の Herder-Institut が出していた *Zur Theorie und Praxis des Deutschunterrichts für Ausländer* シリーズの一冊である。外国人のドイツ語教師と独習者に向けて書かれている。

「まえがき」によれば、記述は前置詞そのものの意味用法に限られ、動詞、名詞、あるいは形容詞に支配される場合は記述の対象としない。また前置詞の意味用法も、空間 (lokal), 時間 (temporal), 原因 (kausal), そして条件 (konditional) に関するものに限られる。

巻末には、前置詞を用いた定型句と慣用句がアルファベット順に、その意味とともに並べられている (全 12 ページ, うち in の項 1 ページ)。

本書の記述は「意味のグループ」(Semantische Gruppen) にしたがう。したがって、本論文で期待する「in の意味用法のまとまった記述」は見られない。

まず空間のグループが説明される。「目標に向かって (zielgerichtet) か」, 「そうでないか」, あるいは「そうでもあり, そうでもないか」と分類され, それぞれの中で各前置詞間の違いが例文とともに説明される。説明の基礎に「各前置詞間の違い」が存在することから, この書は構造主義的手法に基づくものであるとすることができる。たとえば:

*In der Ecke steht eine Bank. / An der Ecke steht eine Bank.*

*Auf der Decke ist ein Tintenkleck. / An der Decke ist ein Tintenfleck.* <sup>(49)</sup>

また次の前置詞用法の違いが説明される。

*Er geht auf den Bahnhof. / Er geht in den Bahnhof. / Er geht zum Bahnhof.* <sup>(50)</sup>

「時点」を表現する前置詞として, 「時間 (述語と副詞句)」, 「一日の時間」, 「日にち」, 「曜日」, 「祝祭日」, 「月」, 「年 (Jahr がある場合とない場合)」に関して, 「正確な表現」か, 「約」かによって, 前置詞が表で示される。<sup>(51)</sup> たとえば「一日の時間」では「正確な表現」として *am Morge, Mittag, Abend* と *in der Nacht*, さらに *um Mitternacht* が縦に並べられ, それに対応する「おおよそ」として *gegen Morgen, Mittag, Abend* と *gegen Mitternacht* があげられる。

---

(49) S. 24.

(50) S. 26.

(51) S. 36f.

後半の **Egerer-Möslein** が担当する「練習」でも、複数の前置詞、あるいは同じ前置詞の異なった用法が並べられ、意味の違いが求められる。たとえば：

Onkel Günther kommt in drei Tagen zu uns. – Onkel Günther kommt für drei Tage zu uns.

続いて「空間」, 「時間」, 「原因」の順で初歩的な練習が要求される。たとえば

Wohin bringen Sie den Kranken? (Poliklinik) → Ich bringe ihn in die Poliklinik.

最後の「定型句と慣用句」では、各前置詞の定型表現と慣用表現があげられる。慣用表現では、上記 Schmitz 同様、それぞれの句の「言い換え」が行われるに過ぎない。

ins Kraut schießen (sich übermäßig entwickeln); im Bilde sein (informiert sein); in die Röhre gucken (leer ausgehen); ins Auge fallen (auffallen)

#### ● Jochen Schröder:

Lexikon deutscher Präpositionen (Leipzig: Verlag Enzyklopädie 1985, 全 268 ページ)

量の上でも、内容の上でも注目すべき書である。主に「副詞的」に用いられる前置詞を対象とする。<sup>(52)</sup>つまり動詞、形容詞、名詞に支配される場合は原則として取り上げられていない。

はじめに、前置詞を「辞典」として取りあつかう際の問題点、対象とする前置詞の範囲、利用上の留意点などについての叙述があり (全 41 ページ)、つづいてアルファベット順に並べられた前置詞の用法が続く (全 195 ページ)。巻末には「格支配」によって前置詞が分類されたあと (全 2 ページ)、34 の意味指標 (semantische Merkmale) によって前置詞が分類される (5 ページ)。意味指標はたとえば, AGENS, FINAL, HERKUNFT, INSTRUMENTAL, LOKAL, MODAL, STELLVERTRETUNG, TEMPORAL などである。

in は 3 格支配と 4 格支配に分けて記述される。

【3 格支配】の説明と例文は 9 ページにわたり、<sup>(53)</sup>次のように分類して説明される。

1. 空間的 (lokal, 4 つの下位分野)
2. 時間的 (temporal, 4 つの下位分野)
3. 文付加語 (Satzadverbialien)
4. 様態 (modal, 10 の下位分野)
5. 特別形 (Sonderformen)

【4 格支配】の説明と例文は 3 ページにわたる。<sup>(54)</sup>分類は次の通りである。

6. 空間的 (lokal, さらに 4 つの下位分野)

---

(52) S. 36.

(53) S. 125-134.

(54) S. 134-137.

7. 目的的 (final)

8. 特別形 (Sonderformen)

以下にそれぞれの説明を代表的な例文とともにあげる。

**【3 格支配】**

1. 空間的

1.1. ある空間が限定的な領域として提示される

a) 空間が満たされている

In der Trinkmilch sind wertvolle Spurenelemente.

b) 空間が満たされていない

Der Bürgermeister hat seinen Sitz im Rathaus.

c) イメージとして空間の基礎と側面が存在する

In den Geschäftsstraßen sollte der Fußgänger König sein.

1.2. 固有地名, 国, 地方など

Die Firma hat ihren Sitz in Wien.

In diesem Land ist der Bergbau besonders entwickelt.

1.3. 具体的に特定されうる職場, 領域など

a) 本来の意味での職場

Seit dem 1. September ist sie in der Schule.

b) 所属

Dieser Minister ist neu in der Regierung.

c) 専門分野, 専門領域

In Chemie war er sehr gut.

1.4. 情報交換のための比較的小規模な集まり

In der Beratung / auf der Beratung wurde eine Konzeption erarbeitet.

2. 時間的

2.1. 瞬間的, または継続的な出来事

In dieser Nacht hatte Thomas kaum geschlafen.

2.2. 時間的な間隔

Im Unterricht wurde heute das chemische Verfahren erläutert.

2.3. あることが起こる一定の期間

In drei Tagen ist die Arbeit kaum zu schaffen.

2.4. 発話の時点より後の期間, または時点

In zwei Tagen sehen wir uns wieder.



### 3. 文付加語

In Wirklichkeit hatte sie ihm gar nicht geschrieben. → In Wirklichkeit war es so, daß sie ihm gar nicht geschrieben hatte.

### 4. 様態: やり方 (Art und Weise) の副詞的規定表現

#### 4.1.

##### a) im + 副詞

Im allgemeinen war die Situation zufriedenstellend; im besonderen, im einzelnen, usw.

##### b) Art と Weise と

In seiner großzügigen Art bezahlte er die ganze Zeche.

##### c) 名詞と

Sie war in höchstem Maße von ihm enttäuscht.

##### d) 特別形 im Detail

Wir müssen die Angelegenheit noch im Detail besprechen.

#### 4.2. 心理的な状態が, ある出来事の状況, あるいは原因をなす

Er hatte in seiner Wut über die Kritik die Arbeit zerrissen.

→ Er hatte vor Wut die Arbeit zerrissen.

→ Er hatte voller Wut die Arbeit zerrissen.

#### 4.3. 線的な規則性 (= -förmig)

In einer langen Schlange warteten die Konzertfreunde auf die Kassenöffnung.

#### 4.4. はっきりと限定されない数量, あるいは変わりうる形態 (= -weise)

Im Sommer ziehen die Berliner in Scharen zum Müggelsee.

Kohlen werden in Säcken, in Kästen oder lose geliefert.

#### 4.5. 言葉による情報, または芸術的方法における手段 (Vermittler) (= -haft)

Lessing gibt in seinen Fabeln Gesellschaftskritik in Gleichnissen und Bildern.

Manchmal spricht er in Rätseln.

#### 4.6. 成果をおさめた際に使われる材料 (Materialien)

Das Bild war in Öl / in Wasserfarbe gemalt.

Der Schlagerkomponist schrieb meist in D-dur.

#### 4.7. 交換において

Im Exportgeschäft gilt, daß Lebensmittel in barem Geld bezahlt werden.

#### 4.8. 体, またはその一部をおおう衣服

Er stand noch in Hosenträgern da, während sie schon in Hut und Mantel war.

#### 4.9. 色彩の形容詞と

In Blau ist das Kleid nicht mehr da.



Sie ging ein ganzes Jahr in Schwarz.

4. 10. 言語

An seinen ausländischen Freund schrieb er in Englisch.

5. 特別形

5.1. außer 1.1. の対。無冠詞<sup>(55)</sup>

Noch war das Boot in Sichtweite.

5.2. sein とともに機能動詞句として。持続的な出来事，または状態の表現で

a) 無冠詞

Die Maschine ist in Betrieb.

in Dienst sein, in Kraft sein, in Kurs sein, in Gefahr sein

b) 冠詞の定・不定，有無とは無関係に

Die neuen Banknoten sind jetzt im Umlauf.

in einer großen Gefahr / in großer Gefahr sein

5.3. 二語以上よりなる前置詞として

im Anblick, im Angesicht; in Anbetracht, im Hinblick auf; im Gegensatz zu など

【4 格支配】

6. 空間的

6.1. 動きが，上の 1.1. で示された領域に向けられた時

a) Er goß etwas Rum in den Tee.

Es gelangen noch zu viele Schadstoffe in die Luft.

b) Der Bürgermeister geht zur Arbeit ins Rathaus.

c) Sie setzte sich in den Sessel.

Er ging in die Geschäftsstraße, um einzukaufen.

in は，該当のものがその空間に本当に達した時は必須である。それに対してその空間への接近の時は，nach 1.6. と zu 1.1. を参照。

6.2. 動きが，上の 1.2. で示された領域に向けられた時

a) 地名（山岳地帯，冠詞を伴う国），地域を示す方位

Er fährt in den Thüringer Wald.

Das Unternehmen exportiert Sportartikel in die Sowjetunion, die Tschechoslowakei und in die Schweiz.

(55) 「außer 1.1.」の例は次のとおり：Bei diesem Wetter war das Boot schnell außer Sichtweite.

b) 行政上の,あるいは地方のまとまり

In der DDR ziehen immer mehr Menschen in die Städte.

Im Sommer fahren viele in den Bezirk Rostock.

6.3. 上記 1.3. の範囲へ gehen とともに

a) 本来の意味での職場

Sie geht jetzt seit einem Monat in die Schule.

b) 所属

Dieser Minister kam neu in die Regierung.

6.4. 情報交換のための小さな集まり (この場合, zu 1.3. の方がよく使われる)

Heute abend gehe ich in die Versammlung.

7. 目的的

特別の形に限られる (収穫, または採集するための動き)

Die Familie fährt heute in die Pilze.

Im Herbst geht es zuerst in die Kartoffeln, dann in die Rüben.

8. 特別形

8.1. 上記の 5.1. に対応

Jetzt kam das Boot in Sichtweite.

8.2. 機能動詞句の一部として。出来事, 状態の発生

a) 無冠詞

in Kraft setzen / treten, in Dienst nehmen, in Umlauf kommen / bringen

b) 冠詞の定・不定, 有無とは無関係に

Das Boot geriet durch den hohen Wellengang in Gefefahr / in eine große Gefahr / in die allergrößte Gefahr.

【3 格 / 4 格】

ein- という前つづりを持つ分離動詞が 3 格と 4 格の両者をとる場合<sup>(56)</sup>

Er stellte seinen Wagen in der / in die Garage ein; Er schloß die Unterlagen in seinem / in seinen Schreibtisch ein.

3 格は, 多分「持続性」と結びついて, 出来事がその場所にとどまることを意図するのだろう:

Er hat seinen Wagen den Winter über in der Garage eingestellt.

(56) S. 137.

4 格は、動作主体の行動と結びついて、「方向性」が表現される : Er hat seinen Wagen erstmals in die Garage eingestellt.

これらの意味分類の下には、当該の意味を規定するために意味指標が並べられる。たとえば「【3 格支配】 / 1. 空間的 / 1.1. ある空間が限定的な領域として提示される」では、a), b), c) を通じて、次のような意味指標となる。

**in** [+loc, +stat, +vol, ±kompakt, +kontakt, +spezial]

これらの指標は次の略である。

loc: Lokalisationsbereich;

stat: Verlauf des Geschehens im Lokalisationsbereich (mit Ausnahme der Fortbewegung);

vol: Dreidimensionaler Raum;

kompakt: Ausfüllung eines mit [+ vol] markierten Lokalisationsbereiches;

kontakt: Kontakt zwischen Gegenstand des Lokalisationsbereiches und lokalisiertem/zu lokalisierendem oder aus einer Lokalisation kommendem Gegenstand

spezial: Bei Lokalisationen in bestimmter Weise erfolgte Ordnung zwischen Bezugsgegenstand und Lokalisator

**Schröder** のこの書は、分類とそれぞれの詳しい説明、そして同じような内容を表現する前置詞との異同のひんばんな指示、また「意味指標」を使った意味内容の規定という意味で、すぐれていると思う。

#### ● Harald Weinrich:

Textgrammatik der deutschen Sprache (Hildesheim u. a.: Georg Olms Verlag, dritte revidierte Aufl. 2005)

本書では、本文 1079 ページのうち、前置詞に 84 ページが割かれている。<sup>(57)</sup> そのうち in の記述は 4 ページにわたる。

テキスト文法ということで、言語現象を（個々の文や語ではなく）より大きな意味単位であるテキストの立場から理解しようとする（「自然な言葉がテキストとしてのみ用いられるからである」<sup>(58)</sup>）。つまり、辞書の意味（lexikalische Bedeutung）とテキストの意味（textuelle Bedeutung）を区別する。テキストの意味とは、辞書の意味（辞書にのっている意味）がいろいろなコンテキスト（言語的）とシチュエーション（非言語的）によって得る意味内容である。<sup>(59)</sup>

かなりの前置詞が、それを支配する動詞、名詞、形容詞の意味から予想しうる（erwartbar）という

(57) S. 612-S. 695.

(58) S. 17.

(59) S. 21.

考え方は、テキスト文法的である: denke an, hoffe auf; Besuch bei, Erfahrungen mit; vorteilhaft für, standhaft gegenüber.<sup>(60)</sup>

in については、in を支配する動詞が in の項の最後に 21 例あげられている。<sup>(61)</sup>

in の意味は、意味指標 (das semantische Merkmal) によって INNEN 「内部」と規定される。<sup>(62)</sup> そしてこの「内部にあること」Innenstellung のいろいろな場合が、たとえば次の例文と句で説明されていく。

/der Apfel in der Hand/

/unser Chemiesaal liegt im Neubauflügel der Schule/

/die Neugierde steht euch im Gesicht geschrieben/

/ich wohne in Deutschland (in der Schweiz, in den Vereinigten Staaten/

/diese Frau hat Temperament im Blut/

/wir treten jetzt in die Diskussion ein/

/in der Hegelschen Philosophie herrscht die Dialektik/

/wir unterhalten uns in deutscher Sprache (aber: auf deutsch)/

in der Vergangenheit, im 21. Jahrhundert, im Frühling, im März, in der Morgenfrühe, in der Pause

前置詞の章の始めで、リブシュ・モニコヴァの小説「Die Fassade」の一節が、前置詞句の観点からテキスト文法的に解釈される。<sup>(63)</sup>しかし個々の前置詞の用法の説明では、特にテキスト文法的という特徴は見られない。

4. 2. 関口存男はどうであろうか？以下に、関口の前置詞 in についての記述の「核」を並べてみる。関口自身はこのような形にまとめているわけではない。関口の著作のそこそこにあるものを佐藤が編集し直したものである。数多い例文も数例に限定した。引用箇所をはじめとするデータの「完全な形」は佐藤（2004）を参照されたい。

#### ① 同一視の in

- A = B, すなわち A が B であるという論理関係を前置詞で言い表すときの筋道。

Der Grieche, oder der Griechensüchtige *in Nietzsche* schämt sich des dem Christen eingeborenen gotischen Ideals, das ein Ideal des Leidens und der Entleiblichung ist; und selbst der christliche Mensch *in ihm* empfindet dunkel, daß das Leiden allein noch nicht rechtfertige vor dem sinngebenden Blick der Gottheit. (*Bertram*)

Nietzsche のギリシャ人気質, というよりはむしろギリシャかぶれした一面は, すべての基督教徒が

(60) S. 612.

(61) S. 635.

(62) S. 632.

(63) S. 619-620.

生れながら持っている、苦難の理想、蟬脱の理想たるゴシック的理想を内々気恥かしく感じている。また、かれの裡なる基督教人さえも、上帝の哲眼に見裁かれた日には、苦難を楯にとったぐらいのことで片付く幕ではないということは薄々感づいてはいるのである

♥ この in は、時には同時性を表現する mit であってもよいことがある : *Mit ihm* ist einer der größten Staatsmänner dahingegangen. 「彼が亡くなったことにより最も偉大な政治家の一人が失われた」

## ② 従事方面の in

- 従事方面、活動領域、没頭事項を示す。

Er übt sich *im Schießen*. かれは射撃の練習をしている | Sie unterrichtet mich *im Tanzen*. 彼女が私にダンスを教える | Lachend und Schweiß vergießend, konnten die beiden nur langsam *in dem Geschäft* fortschreiten. (Tieck)

♥ 「従事方面の in」は、その能力を評価したり、他と比較したりする場合には、次項の「見地の in」として現れる。

♥ 「従事方面の in」は一部、「従事対象の mit」と合致する。

♥ 「従事方面の in」は、「進行過程の in」と一致する場合がある : Ich will niemanden *in der Ausführung* seiner guten Vorsätze hindern. (Sudermann) 私は他人が殊勝な心掛けを実行するのを妨げようとは思わない

## ③ 見地の in

Die Butter steigt *im Preis*. バターの値段が上がる | Wenn der Morgendunst sich verzogen hatte, sah ich den Steinadler reglos in der klaren Luft stehen, den Räuber mit neidenswerten Augen, herrlich *im Niederstoß* und königlich *im Aufflug*. (Thieß) 朝霞があがると、清く澄んだ空中に大鷲が羽根をひろげて凝と浮かんでいるのが見えた。大鷲は、羨ましいほど立派な眼をした猛禽で、急転直下、襲い来たるや颯爽、飛び去るや悠々たるものがある | *im Grundsatz* (= grundsätzlich) 原則として

♥ 「見地」の表現には、「見地の an」, 「見地の nach, hinsichtlich, in Hinsicht auf, in Ansehung des, in (mit) Rücksicht auf」など多くの前置詞があるが、名詞が不定形名詞の場合は「見地の in」に限る。

♥ 「見地の an」との違いは、in が「領域」または「従事方面」の含みをもった見地であるのに対し、an は「性質」, 「具有性」の含みをもっている。

## ④ 局限化の in (「見地の in」の一種)

- 見地をある一部分に限定する。

Die Diktatur ist *in ihrem Prinzip* kulturfeindlich. 独裁政治はその根本精神が反文化的である | Nicht jeder kann diese Philosophie *in ihrer ganzen Tiefe* erfassen. この哲学がどんなに深遠であるかということとは、必ずしも誰もが把握できるわけではない

- ♥ 「局限化の in」は「一つの見地に局限する」という意味で、前項の「見地の in」の一種である。
- ♥ in の次に来る名詞は、先に立つ主語、または4格名詞の概念を、いずれかの「一部分」に局限するか (Seine Ausführung ist in ihrem **Ausgangspunkt** verfehlt.), またはその「一性質」に限る (Wir haben die Weltkrise in ihrer ganzen **Schärfe** erfahren.)。
- ♥ in の句とそれが関係する語との間は、2格を使って表現することができる: Die Diktatur ist **in ihrem Prinzip** kulturfeindlich. = Das Prinzip **der Diktatur** ist kulturfeindlich.

#### ⑤ 進行過程の in

- ドイツ語には英語のような進行形がないが、自動詞の場合には「進行過程の in」と不定形名詞とによって同じことが表現できることが多い。この場合、不定形名詞には定冠詞がついて im となる。Sie liegt **im Sterben**. 彼女は死にかかっている | Der Feind ist **im Vordringen**. 敵はどんどん進出しつつある | Er grüßte mich **im Vorübergehen**. かれは通りすがりに私に会釈した
- ♥ 「進行過程の in」は、「従事方面の in」と一致する場合がある: Ich will niemanden **in der Ausführung** seiner guten Vorsätze hindern. (Sudermann)
- ♥ 厳密な「進行過程」の表現には im ... begriffen を用いる。

#### ⑥ 付帯描写の in

- 主体の一部をなしている「属性」, 「特色」, 「性質」を描写する。Sie **in Ihrer mehr äußerlichen Art** werden nichts Rechtes zustande bringen. あなたのやり方はどちらかというと形式的で、それでは到底ろくなことはできませんよ | „Wir kommen, Ihnen **in Ihrer Einsamkeit** die Zeit kürzen zu helfen,“ sagten die Abderiten. — „Ich pflege **in meiner eigenen Gesellschaft** sehr kurze Zeit zu haben,“ sagte Demokritus. (Wieland) 『あなたは、見たところ一向お話し相手もおありにならないようですから、少しでもお退屈しのぎにでもなればと思って出かけてまいりました』とアブデラ市の人たちは言った。——『私は、話し相手といえば自分一人が話し相手ですが、退屈はもう十分しのげております』とデモクリトスは言った
- ♥ 「付帯描写の in」は、直前の名詞を受ける所有冠詞 (sein, ihr など) を伴うのが原則である。
- ♥ この用法に導かれる句は、たいていの場合名詞付加的 (adnominal) である。
- ♥ この用法で表される関係は、空間的關係で表そうとすると、「ちょっとどう言って良いか分からない」ほど、主体の一部をなしている「属性」である。
- ♥ この用法は、④の「局限化の in」, あるいは「主観的原因を表す in」に近づこうとする傾向がある。

#### ⑦ 結果の in, 結果挙述の in

- 動詞によって示された動作が行われた後にはじめて生まれ出る「結果」をあらわす。ある動作の

結果としてできあがる状態を表す。

Zwischen zwei wahrhaften Gegensätzen ist in alle Ewigkeit hinaus keine Vermittlung möglich. Die wahre Vermittlung ist die Auflösung der Gegensätze *in ein höheres Drittes*. 真に相反する二つの事柄の間には未来永劫にわたっていかなる調停も不可能である。真の調停はこの対立を解いて以て一段高き第三のものに変えることでなければならない | Der schwedische Naturforscher Linné ordnete vor über 200 Jahren alle lebenden Wesen nach ihren verwandtschaftlichen Beziehungen *in ein System*. 「スウェーデンの生物学者リンネは、200年以上前にすべての生物をその親縁関係にしたがってひとつの体系に整理した」

- ♥ 「結果の in」とともに用いられる動詞は、「意味」はそれぞれ違っても、「意味の型」は machen または werden である。
- ♥ 「結果の zu」と同じ用法である。ただし、(1) in は、変化する「経過」と「移り行き」をじょじょに進んでいく過程として表現するが、zu は移り変わって到達した最後の状態におもに注目させる。(2) in は到達の目的がハッキリしないで、時には無限なることを思わせるが、zu は、到達すべきところに到達すればそれでハッキリと形がつくことを思わせる。

#### ⑧ 転化終結の in

Die beiden kurz von uns angedeuteten Richtungen der Vernunftphilosophie münden *in der Hegelschen Philosophie* zusammen. (Georg Lasson) 「簡単に触れた理性哲学の二つの傾向は、ヘーゲルの哲学において一つになった」 | Dieses unerwartete Schauspiel zog die jungen Gemüter mit Gewalt an sich; besonders auf den Knaben machte es einen sehr starken Eindruck, der *in eine große langdauernde Wirkung* nachklang. (Goethe) 「この予期しなかったお芝居は、若者たちの心を強烈に引きつけた。特に少年たちに強烈な印象を与えたが、その印象は大きな長く続く効果となって心に残ったのだ」

- ♥ 4格支配は「運動型」であり、3格の場合は「力が入る」:

#### ⑨ 展張方向の in (上記 3.2.1. 展張方向参照)

#### ⑩ 激突急停止の in (上記 3.2.1. 展張方向参照)

#### ⑪ 傾向の in, 趨行の in (上記 3.2.1. 展張方向参照)

#### ⑫ 経過遷延の in (上記 3.2.1. 展張方向参照)

- 特に in den Tag hinein (その他 in den Augenblick hinein ほか) という句だけは特殊な意味を帯びて、いわば「大した考えもなく」(gedankenlos), 「ぼんやりと」(vor sich hin), 「ふらふらと」, 「浮ついた調子で」, 「無我夢中で」, 「無計画に」などの意味になる。

JULIANE : Was meinst du damit? / HENRIETTE : Muß man denn immer etwas meinen? Du weißt ja wohl, Henriette schwatzt gerne *in den Tag hinein*, und sie erstaunt allezeit selber, wenn sie von ohngefähr ein Pünktchen



trifft, welches das Pünktchen ist, das man nicht gerne treffen lassen möchte. (*Lessing*) JULIANE: それはどう云う意味で仰言るの? / HENRIETTE: どう云う意味なんて, そんな事をいちいち考えていたら, 口が利けなくなっちゃうわ。私は別に何も考えずに喋舌るのが好きなの。何も考えずに喋舌っているうちに, 壺にはまった事を言っちゃうと自分でもビックリしちゃうんですよ。殊に其の壺というのが, はまっちゃあ不可なかつた壺だったりすると, なおさらよ

⑬ 展張限度の [bis] in

- 上記の「展張『方向』の in」は, 徐々に「...に至るまでも」という「展張『限度』の [bis] in」へと移行して行く。
- そのもっとも典型的な場合が in die Hunderte gehen 「数百におよぶ」, in die Tausende gehen 「数千におよぶ」という成句である。数名詞の複数形を用いて, しかも必ず定冠詞を伴うのが特徴。

Sie verlangten ungeheure Summen, die mindestens **in Zehntausende** gingen. (*Zeitung*) かれらは, すくなくとも数万マルクに達する巨額を要求した | In der amerikanischen Großstädten dagegen **gehen** die Zahlen hoch **in die Hunderttausende**. (*Zeitung*) それに反して, アメリカの大都市では, 無慮数十万という数字を示している

- 「展張限度の [bis] in」の次には, とにかく「領域」として考えられる名詞 (したがって定冠詞) が要求される。以下の形容詞の中性名詞化は, 「域」を考え, 「世界」を脳裏に描いて用いられている。

Die Gerichtsakten vermehren sich **[bis] ins Unermeßliche**. 裁判書類はほとんど数えきれないほど膨大になる | Die Spannung wächst mit der Zeit **[bis] ins Unerträgliche**. 緊張は時と共に耐え難きほどの程度に達する

- 「展張限度の [bis] in」は, 必ずしも数名詞と中性名詞化形容詞だけと用いられるとは限らない。一般に「...に至るまでも」の意味でいかなる種類の名詞とも結合し, 時とすると bis zu ... と何の差もないことがある。

So ging das Leben Kants durchgängig wie das regelmäßigste aller Zeitwörter; alles war überlegt, durchdacht, nach Regeln und Maximen bestimmt und festgesetzt, **bis in die kleinsten Umstände, bis in den täglichen Küchzetteln, bis in die Farbe** jedes einzelnen Stücks seiner Kleidung. (*Fischer*) かくのごとく Kant の日常生活は最も規則正しい規則動詞のごとく規則的であった。諸事万端が最も些細な点に至るまで, その日その日の献立表, 衣類の一つ一つの色彩に至るまで, すべて予めよく考慮され, 考え尽され, 規律と信条とに従って決定確立されていたのである

- ♥ 上記の「⑫ 経過遷延の in」が bis をともなうことにより, 「展張方向」は「展張限度」へと移行していく。

Man vergleiche z. B. die englische Fabrikgesetzgebung unsrer Zeit mit den englischen Arbeitsstatuten vom 14. **bis tief in die Mitte des 18. Jahrhunderts**. (*Karl Marx*) たとえば現代の英国の工場法と, 十四世



紀から初まっでずっと十八世紀の半ばにまで及ぶ労働法規とを比較して見るが好い

- ♥「展張限度」も上記の「展張方向」同様, in と 4 格の持つ指向性と運動惰性をさらに一層強く表現しようとして, 句の最後 (または最初) に *hinein, hinaus* がつけられることがある。

#### ⑭ 着用・装身の in

- *tragen* (「身につけている」) の意味。

Der alte Wittig, ein grauhaariger Schmied, ohne Mütze, *in Schurzfell und Holzpantinen*, rußig, wie er aus der Werkstatt kommt, ist eingetreten. (*Hauptmann*) 「白髪頭をした鍛冶屋の老 Wittig が入ってきた。仕事場からやってきたままに, 帽子をかぶらず, 毛皮の前掛けをつけ, 木のサンダルをはいて, すすにまみれていた」

- ♥「着用・装身の in」は, 「保有描写の mit」で表現することもできる。

#### ⑮ 配量の in

- 「一つ一つを別個のものとして」という「配量 (Dosierung)」を表す。

„Ja, was ist dabei zu tun? ... Na, gut! ... Ich werde alles tun ... Sei nur beruhigt!“ sprach er *in Absätzen*. „だつて, こうなりゃモウどうにもなるまい... まあまあ, いいじゃないか! ... 出来るだけのことはやってみる... 心配するな!“ とかれはポツリポツリ言った | *Zigarren in Stücken* verkaufen シガーをバラで売る | *in langen Zügen* グーッと (飲む)

- ♥ 最初の例の in *Absätzen* は, *absatzweise* または *Absatz für Absatz* とも, またふたつ目の in *Stücken* は *stückweise* とも言うことができる。

#### ⑯ 帰依信奉の in

- 主として聖書の用語で *in Gott, im Herrn, in Jesu Christo, in Christo* などとして現れる。

Und wie die Harmonie des einzelnen Menschen gestört ist, wenn er nicht *in Gott* lebt, so sind alle menschlichen Ordnungen davon vergiftet, ... (*Zeitung*) 「一人一人の人間が, もし神を信じて生きないのならばその調和が乱されてあるように, 人のすべての秩序は以下のことによって毒されてあるのである」 | *im Namen* des ... ... の名において | *im Interesse* des ... ... の利害を代表して, ... のために | *im Sinne* des ... ... の意味で | *im Geiste* des ... ... の精神を体して

- ♥「帰依信奉の in」が, 「名」と「実」が一致することを示すのに対して, 「名」と「実」が一致しないことを暗示するのが「偽装韜晦の unter」である: *unter dem schönen Namen* des ... 「... の美名に隠れて」

#### ⑰ 占拠領有の in

- 単に或る状態にあるのではなく, その状態を己が利として占拠領有し, よってもって実力を発揮しうること (あるいはその正反対) の含み。

Sei *im Besitz*, so wohnst du *im Recht*. 財を持って, 然からば理を持たん | *Ihr wollt gegen die andern, im*

*Rechte*“ sein. Das könnt ihr nicht, gegen sie bleibt ihr ewig „*im Unrecht*“; denn sie wären ja eure Gegner nicht, wenn sie nicht auch *in „ihrem Rechte*“ wären. (*Stirner*) 諸君は他の者達に対して言分を通そうとしているが、それは出来ない相談で、彼等にとっては諸君の言分は永久に „間違っている“ のである。というのは、彼等にも彼等の言分があるので、言分があればこそ諸君の向うを張っているのではないか | *im Vorsprung* sein 一歩先んじている, 有利なハンディキャップがついている | *im Nachteil* sein 損な立場にある, 見劣りがする

♥ *in* の後の名詞は原則として定冠詞を温存する。

♥ この *in* とほぼ同じものに「**所有の bei**」がある。こちらは必ず無冠詞である: Er ist *bei* guter Gesundheit. 「彼は健康である」

♥ 「占拠領有の *in*」, 「所有の *bei*」の逆は *aus*, *außer* または *von* である: *aus* dem Gleichgewicht kommen 「バランスを失う」, *außer* Besitz bringen 「財産を取り上げる」, *von* Sinnen sein 「分別を無くしている」

#### ⑱ 用件の *in*

- 用件 (Angelegenheit), 用談 (Geschäft), 利害 (Interesse), 依頼 (Auftrag), 用務 (Dienst), 問題 (Sache) など「で」会ったり, 話したり, 発言したり, 奔走する際には, これらの名詞には *in* を用いるのが習慣。

Ich hätte Sie *in einer äußerst wichtigen Angelegenheit* zu sprechen. ちょっと非常に重要な用件でご面会したいのですが | Wer *in seinem eigenen Interesse* handelt, ist immer erfinderisch; da kann man was lernen. Wer aber *in fremdem Interesse* handelt, ist es im vollen Sinne des Wortes nicht, weil da der Egoismus, diese Triebkraft allen Erfindungsgeistes, fortfällt. 自分自身の問題で何かやる時には誰でも頭が良く, 感心させられることも多いが, 他人の問題となると, 利己心というこのあらゆる頭の良さの原動力が欠けてくるから, 本当に頭が良いとは言われない

♥ 語によっては *wegen* を用いることもできる: *Wegen* dieser Angelegenheit habe ich Ihnen oftmals einen Brief schreiben wollen. この件に関してはたびたびお手紙を差し上げようと思った

#### ⑲ 様式的手段の *in*

- 「言葉で言い表す」, 「概念で考える」, 「喩えで話す」, 「現金で支払う」, 「数字で示す」, 「謎で話す」, 「暗号で報告する」, 「手紙で伝える」などの「で」は, *mit*, *durch* が自然なように思われるが, その他に主として「形」を思わせる *in* という, ごく自然な前置詞がある。

*in Bargeld* zahlen 現金で支払う | Philosophieren heißt *in Begriffen* denken, was sich eigentlich nicht *in Begriffen* denken läßt, und *in Worten* ausdrücken, was eigentlich nicht *in Worten* auszudrücken ist. 哲学するとは, 本当は概念で考えられぬことを概念で考え, 本当は言葉で言い表し得ぬことを言葉で言い表すことである

## ⑳ 現場の in

- 「その現場を」。

Ich war die Herrin heute, und niemand war da, mich **in meinem Tun** zu belauschen oder gar mich daran zu hindern. 「今日は私が主人だった。私が何かしているところを盗み聞きしたり, あまつさえその邪魔をしたりする者なんか誰もいなかった」

♥ in の次には動作名詞が来る。

## ㉑ 範囲・分野

Sonja Henie gewann 1936 in Garmisch-Partenkirchen bei den Olympischen Winterspielen die Goldmedaille **im Eiskunstlauf**. (Zeitung) 「Sonja Henie は 1936 年, ガルミッシュ・パルテンキルヒェンの冬季オリンピックにおいてフィギュアスケートで金メダルを獲得した」 | Es enthält obendrein gut reproduzierte Abbildungen der alten Kunstwerke und bietet ein Musterbeispiel unterhaltender Belehrung, nicht nur **in Sachen** der Wissenschaft, sondern auch der bildenden Kunst. (Zeitung) 「さらに加えてこの本は, 古い芸術作品の上質な複製図をのせており, 単に学問の分野だけでなく, 造形芸術の分野においても, 楽しみながら学ばせる模範的な例となっている」

## ㉒ Resignations-in

- 「あきらめて」 落ち着く先, 「甘んじる」 対象を表す。

sich **in das Unvermeidliche** fügen 「運命に甘んじる」 | Es gibt nur einen Trost für mich — das mohamedanische Kismet, die Resignation **in das Unabänderliche**. (Blütgen) 「私にとってはたった一つの慰みがあるだけです。それはイスラム教の宿命です, 避けられない運命に身をゆだねることです」

## ㉓ 分析, 分解

Die Welt ist **in zwei Heerlager** gespalten, **in das demokratische und das kommunistische**. 「世界は二つの陣営に分裂している。民主主義陣営と共産主義陣営である」 | Um den Flächeninhalt aller gradlinigen Figuren zu bestimmen und zu vergleichen, löst man sie **in Dreiecke** auf. (Marx) 「あらゆる直線的な図形の面積を求め, 比較するには, その図形を三角形に分解するのである」 | **in Scheiben** geschnittene Eier 「輪切りにされた玉子」

## ㉔ 盲目的没入・信用・放任の in

Denn die Währungsunsicherheit ist der tiefste Grund für die allgemeine Unsicherheit, unter der die Franzosen heute leiden. Der sparsame, auf die Sicherheit seines Lebens bedachte Franzose verliert mit dem Vertrauen **in den Franc** das Vertrauen **in sich selbst**. (Die Zeit) 「というのは, 通貨が不安定であるということがフランス人たちが今日苦しんでいる不安のもっとも深刻な理由だからである。つつましく, 自分の生活が確かであることを心がけているフランス人にとっては, フランへの信頼を失うことは自分自身への信頼を失うことになるのである」 | Ich glaube gar, du setzest ein Mißtrauen **in mich**. Wart, laß mich

erst warm werden! (Schiller) 「私にはそれどころか、お前が私に疑惑をいただいているようにさえ思える。待つがいい。私をまずは熱くさせるがいい！」

#### ②⑤ 関係を表現する in

- mit ... (「相手の mit」) をともなって、「～と関係している、争っている、齟齬する、一致する、接触を保つ、諒解がある、同盟している、交際している、文通している」などを表現する。

Was er tut, steht mit dem, was er sagt, *im Widerspruch*. 「彼はすることとすることが矛盾している | Die beiden Kräfte stehen miteinander *im Gleichgewicht*. 「両勢力は均衡を保っている」

4. 3. 関口と他の研究者たちとの違いは次のように説明されるだろう。

#### 4. 3. 1. 意味分類のあり方の違い

**Schmitz** の場合、in の意味分類は lokal, temporal (Zeitraum, Zeitpunkt), modal の3つであり、それ以上の細分化はなされていない。

**Schröder** では、in の意味用法が LOKAL, TEMPORAL, MODAL, FINAL と分類された後、さらに細分化がなされる。たとえば LOKAL と TEMPORAL はそれぞれ次のように細かく分類された。

LOKAL 「ある空間が限定的な領域として提示される場合」 im Rathaus

「固有地名、国、地方など」 in Wien

「具体的に特定されうる職場、領域など」 in der Schule

「情報交換のための小規模な集まり」 in der Beratung

TEMPORAL 「瞬間的、または継続的な出来事」 in dieser Nacht

「間隔」 im Unterricht

「あることが起こる一定の期間」 in drei Tagen

「発話の時点より後の期間、時点」 in zwei Tagen

また「MODAL」の場合は、「形態」によるもの (im + 副詞; Art と Weise と; 名詞と), あるいは「色彩の形容詞と」、また「体、またはその一部をおおう衣服と」という細分化である。そのほかの場合も、「細分化」は、具体的にせよ、抽象化が進むにせよ、「形」(Form) にしたがったもの(形に基づいた分類)とすることができる。

それに対して、関口の「局限化」、「付帯描写」、「転化終結」、「展張方向」、「展張限度」という意味用法は、「形」を拠り所としたものではない。それは個々の具体的な表現の背後に存在する「(人間の) 考え方」であり、人間がどのように「言語外事実」を把握するかという、「事実の把握の仕方」

である。それは必然的に、「細かな」分類になるとともに、哲学的な解釈と深く結びつく。(64)

#### 4. 3. 2. 関口の命名の妙と適切さ

関口の言う「局限化」, 「付帯描写」, 「転化終結」, 「激突急停止」, 「経過遷延」, 「帰依信奉」, 「占拠領有」などという表現は、非常に印象的であり、それぞれの意味用法を的確に表現している。この名称だけで説明の大部分をカバーしていると言っても過言ではない。

一方 **Schröder** のたとえば次のような「意味指標」は、前置詞の各用法を厳密に規定しようとする試みである。

**in** [+loc, +stat, +vol, +-kompakt, +kontakt, +spezial]

このような意味記述は、前置詞辞典としては独創的であり、その意味で **Schröder** の功績は高く評価されるべきであろう。しかし、実際にこの書を **Nachschlagewerk** として使用する学習者の立場からは、この「意味指標」は抽象的なレベルにとどまり、実際の運用にはほとんど役に立たないと言ってよい。

#### 4. 3. 3. 関口の説明の的確さ

関口の説明は、物語る口調でありながら、冗長になることなく、確実に問題の核心をついていく。端的に言って「分かりやすい」。また同じ前置詞、あるいは他の前置詞の意味用法との異同の説明も詳細をきわめ、実用に耐える。

**Schröder** にも、たとえば上記の *Er stellt seinen Wagen in der/in die Garage ein.* の例のように、(65) 話者がこの場合に 3 格と 4 格を使う背景の説明が見られる。それは説得力を持つものであるが、このような説明は **Schröder** の書を通じてごく一部に見られるに過ぎない。

#### 4. 3. 4. 本論文はしかし、関口以外の前置詞研究の存在を否定しようとするものではない。

**Forstreuter/Egerer-Möslein** は外国人学習者用に書かれたものであり、**Schmitz** と **Schröder** も、ドイツ語母国語者と外国人学習者の手引きとして考えられたものである。それぞれ、参照する者に手取り早い知識を与える書として意味がある。また **Weinrich** は、「テキスト文法」という立場からの前置詞研究として注目に値する。これらはみな、それぞれに異なった課題を持つ書なのである。

(64) 関口の「分類の細かさ」については、**mit** の場合の次の言葉が参考になる：「これが即ち我々が求めてゐた **mit** なるものの正體です。**mit** の諸相を研究するには、なかなかこんな大ざっぱな話では駄目で、私が目下立ててゐる範疇だけでも既に二十八九項目に達してゐますから、事実上忠ならんとすれば恐らく三十以上にもなるでせう。こゝでは単にその重要な二三に触れたきりですが、仲仲変わった使ひ方をする面白い前置詞だと云ふことだけはおわかりになつたでせう。」ドイツ語前置詞の研究, S. 19. 下線佐藤。

(65) **Schröder**, S. 137.

## 5. 関口の研究はどのようにして可能だったのか？

関口の研究はどのようにして、以上述べてきたような形をとることができたのだろうか？ **N. R. Wolf** が書評で書いているように、それは「日本とヨーロッパの文化的相違」に基づくのであろうか？確かにひとつの説明であろう。ドイツの人々には目に入らない事柄が、「外からは見える」ことは想像に難くない。しかしそれは本質的な理由ではない、と私は思う。関口の研究を可能にした要因として私は次の諸点をあげる。

- (1) 動詞との関連からの前置詞研究
- (2) 意味内容の多層的な理解
- (3) 関口が言語学者である以前に哲学者であったという事実
- (4) 「統合文法」的な研究手法

5.1. 関口は、「前置詞研究」を動詞の前置詞支配との関係からおこなうべきであると考えていた。たとえば関口は次のように述べる。<sup>(66)</sup>

ただ、此の形態 (=「仕打ち」の an) は、.....その伴ふ動詞の意味が略一定してゐます。形式文法では、単に an を支配する動詞として、an そのものに対しては何の考察も向けられてゐない様に見受けませんが、度々宣言して来た通り、前置詞研究は、動詞の前置詞支配なる現象をば、逆に、前置詞の意味形態を明確に把捉することによつて段々と系統付けて始めて真の研究たり得るのです。

この、「動詞との関係から」前置詞の用法を観察するという研究姿勢は、「前置詞そのもの」にだけ注目する場合に比して、前置詞研究にあらたな光を当てるものとなったであろう。

関口文法にとって動詞はつねに重要な意味を占めているが、<sup>(67)</sup>それはこの前置詞研究においても確認することができるのである。

5.2. 関口は意味内容を「多層的」に理解していた。関口はたとえば次のように述べる。<sup>(68)</sup>

たとへば「復讐する」と「寛大な態度をとる」との間には、意味の共通点はちつともない、むしろ意味は反対です。ところが、復讐するにしろ、恕すにしろ、とにかくそれが一人の人間に対する「仕打ち」であることは似てゐます。好い「仕打ち」であるにせよ、悪い「仕打ち」であるにせよ、とにかく茲では一人の人間が他の人間から或種の「仕打ち」を「加へられる」のです。「蒙る」のです。手紙を受け取ったり、物を貰ったり、話を聞いたりするのは非常な相違です。

(66) ドイツ語前置詞の研究, S. 60. カッコ内補足と下線佐藤。このほか以下も参照: ドイツ語学講話, S. 376.

(67) たとえばドイツ語学講話, S. 408 を参照。

(68) ドイツ語前置詞の研究, S. 62f. 下線佐藤。



つまり、「復讐する」と「寛大な態度をとる」とは、「異なった意味」を持つが、ともに「仕打ち」というひとつの意味形態に属する。

このように、意味の多層性を前提として言語を研究することは、おのずと異なった言語観察を可能にする。

5.3. 関口は、言語学者である以前に哲学者であった。彼の言語研究の背景には広く深い哲学的な認識が存在する。それは、著作に見られる数多い哲学書からの例文、そしてそれらドイツ語の非常にこなれた日本語訳からもわかるし、いたるところに現れる Kant, Hegel, Heidegger などへの言及もそれを証している。たとえば Heidegger について関口は次のように述べる。<sup>(69)</sup>

思想が言語を規定すると同時に、言語も亦思想を規定して行くものであるといふ事実は、斯くの如き方面からも立派に証明されるのです。かうした現象によつて最も甚大なる影響を蒙るのは、先ず何を措いても第一に哲学の方面であらうといふ事は想像するに難くもなく、また立証するにもさう困難なことではないと考へます。度々引き合ひに出す Heidegger などがそれで、Heidegger とドイツ語とは絶対に分つことが出来ません。さういふ意味に於て、言語と思想との関係を考へる時、少くもドイツに於ては、私は Heidegger の場合が最も面白い問題を提供していると考へるのであります。

上記「*am Tage* と *in der Nacht*」の違いについての説明も、その背景に関口の哲学に関する深い素養が存在した。

5.4. しかし、関口の言語研究を可能にした要因の「最も本質的な」ものは、(すでに本論文の 4.3.1. に示されているように) 関口の「**統合文法的**」な研究方法である。

「意味形態」という「普遍的な考え方」が基礎にあり、そこから出発してそれぞれの前置詞を観察したからこそ、そして「**統合文法的**」な立場から独・仏・英・羅・希ほかという個別言語において意味形態の存在を確認したからこそ、<sup>(70)</sup> 関口は上記のような研究成果を残すことができた。

「部分的処理完成」、あるいは「同一視」、「見地」、「展張」という意味分類はすべて、まさに「**統合文法**」の立場から生まれてきた「意味形態」、つまり私たち人間の「普遍的な考え方」なのである。<sup>(71)</sup>

この意味で、「当面過程の an」、「展張方向の in」という**命名の順序**にも注目すべきである。「当面過程の an」であり、「an の当面過程」ではない。つまり「an のひとつの用法として当面過程がある」のではなく、「当面過程」という人間普遍の考え方がある、その表現のひとつの可能性としてドイ

(69) ドイツ語学講話, S. 367. 下線佐藤。

(70) 関口存男は生前、30年以上にわたり、独・仏・英・羅・希・ 에스ペラントなど 10以上の個別言語から文例を収集した。それは A4版のコピーにまとめられて 24,502 ページに及ぶ。この資料についてはたとえば以下を参照: 関口存哉 (1997)。

(71) Kürschner は注 (4) にあげた講演において、たとえば「部分的処理完成」という名称はドイツ人に奇異に響くが、こういう名称は関口が「ドイツ語教師であり、教え子たちに分かりやすい表現を用いた結果だ」と指摘した。しかし、関口の用語を「教育的」にだけ解するのは、的を射ていないと思う。



ツ語には an があるのである。まず意味形態の名称があつて、それに an, mit などが続くという「命名の順序」も「統合文法」的研究から出てきた必然的なものであった。

さらに関口が前置詞の Nachschlagebuch を書こうとしなかったことにも注目する必要がある。関口は「ドイツ語前置詞の研究」の「序(1)」で次のように述べている。

量から見ても、また項目を一見しても解る通り、本書は決して前置詞の凡ゆる形態を洩れなく網羅したものでなく、また Nachschlagebuch として編纂したものでもありません。(下線佐藤)

関口が Nachschlagebuch を書かなかつたこと、それに対して Schmitz, Schröder がアルファベット順の Nachschlagebuch であることはけだし偶然ではない。「統合文法」的な研究観点に立つ関口にとっては、abc 順の Nachschlagebuch は自らの研究態度に反するものであった。「当面過程の an」, 「部分的処理完成の an」という項目では、abc 順の Nachschlagebuch に成り得なかつたのである。<sup>(72)</sup>

## おわりに

関口の前置詞についての研究成果は、「ドイツ語前置詞の研究」だけではない。著作のいたる所に注目すべき識見がある。私はそれらをまとめて、「関口前置詞辞典」を編集し、出版したいと思う。そこでは分類と例の羅列に終わるのではなく、背景的説明も詳しくあげることになるであろう。いわば「Nachschlagebuch として考えたものではない」ものを Nachschlagebuch として編集し直し、日本のドイツ語学習者、教育者、研究者の利用に資したいと思う。<sup>(73)</sup>

そこにあげられる意味形態(たとえば「展張の in」の「展張」)は、前置詞以外の関口文法の発展へともつながっていくことになるだろう。

2002年3月、姫路で Eugenio Coseriu は車椅子に乗りながら、「私の著書『関口存男』について」という講演をした。<sup>(74)</sup>これは Coseriu の最後の講演のひとつとなるものであった。そこで彼は、「関口が知られないままにとどまるとすれば、それは言語学にとって多大な損失を意味することになるだろう」と断言した。関口存男の理論・成果の理解と発展を、特に若い世代の研究者に期待したいと思う。

(72) 関口は、「冠詞」に続く研究書のひとつに「前置詞論」を考えていたが、もし「前置詞論」を書いたとしても、それは abc 順の Nachschlagebuch ではなかつたはずである。

(73) その一部はすでに発表した: 佐藤(2002), — (2003), — (2004), — (2005), — (2006).

(74) 本論文注(4)の公開講演会を参照。

## 引用文献

- 有田潤 (1980): 「意味形態」管見. 所収: ドイツ語学研究 (三修社) 2, S. 41-43.
- (1985): 「意味形態」の成立. 所収: 有田潤: ドイツ語学講座 I, 南江堂, S. 85-89.
- (1987): 「意味形態」批判. 所収: 有田潤: ドイツ語学講座 II, 南江堂, S. 39-65.
- Gabelentz, Georg von der (1881): Chinesische Grammatik. Mit Ausschluß des niederen Stiles und der heutigen Umgangssprache. 4., unv. Aufl. Halle: Niemeyer 1960.
- (1891): Die Sprachwissenschaft, ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse. Leipzig: Weigel Nachfolger; 2., verm. u. verb. Aufl. Leipzig: Tauchnitz 1901, Nachdruck: Tübingen: Narr 1972.
- 国松孝二 (1959): 意味形態論の解説の試み. - 亡き関口先生に -. 所収: 関口存男の生涯と業績, 三修社 1975, S. 507-517.
- 牧野紀之 (1976): 関口ドイツ語学の研究. 鶏鳴出版.
- SATÔ Kiyooki (1981): Zum Begriff der *Dritten Bedeutungsform* bei Sekiguchi. In: 立教大学ドイツ文学科論集 アスペクト 15, S. 38-55.
- 佐藤清昭 (1996): 表現するため文法のあり方. - G. von der Gabelentz, F. Brunot, 関口存男を手がかりとして -. 所収: 浜松医科大学紀要 一般教育, 10, S. 99-114.
- (1998): 関口存男文例集. - 分類の観点と利用の可能性 -. 所収: 浜松医科大学紀要 一般教育, 12, S. 57-73.
- (2002): 前置詞研究のあり方. 「関口存男: 前置詞論」試案 - an を例として. 所収: 浜松医科大学紀要 一般教育, 16, S. 31-53.
- (2003): 関口存男における前置詞 auf. 所収: 浜松医科大学紀要 一般教育, 17, S. 43-66.
- (2004): 関口存男における前置詞 in. 所収: 浜松医科大学紀要 一般教育, 18, S. 53-79.
- (2005): 関口存男における前置詞 mit. 所収: 浜松医科大学紀要 一般教育, 19, S. 25-47.
- (2006): 関口存男における前置詞 zu. 所収: 浜松医科大学紀要 一般教育, 20, S. 11-35.
- 関口存哉 (1997): 関口存男の文例集について. 所収: Brunnen (郁文堂) 385 (Mai 1997), S. 3-6.
- 関口存男 (1931-1933): ドイツ語大講座. 全 6 巻, 外国語研究社 1936. 再録: 関口存男著作集 ドイツ語学篇 第 5, 第 6, 第 7 巻, 三修社 1994.
- (1934): 搬動詞 [Lativum]. 所収: 関口存男: ドイツ語学講話 1, 三修社 1975, S. 41-51.
- (1935-39): 独作文教程. 三修社 1971.
- (1938-40): ドイツ文法 接続法の詳細. 三修社 1985.
- (1939): ドイツ語学講話. 三修社 1981.
- (1943 a): 意味形態を中心とするドイツ語前置詞の研究. 三修社 1977.
- (1943 b): あぢきなや ... とて [daß] なげきしか. 所収: 独語文化, 1943 年 8 月号, S. 31-36; 再録:

関口存男著作集 別巻「ドイツ語論集」, 三修社 1994, S. 219-224.

— (1960/61/62): 冠詞. —意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究—, 全3巻 三修社 1976.

